

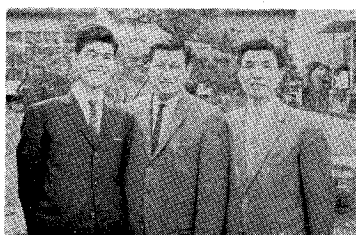
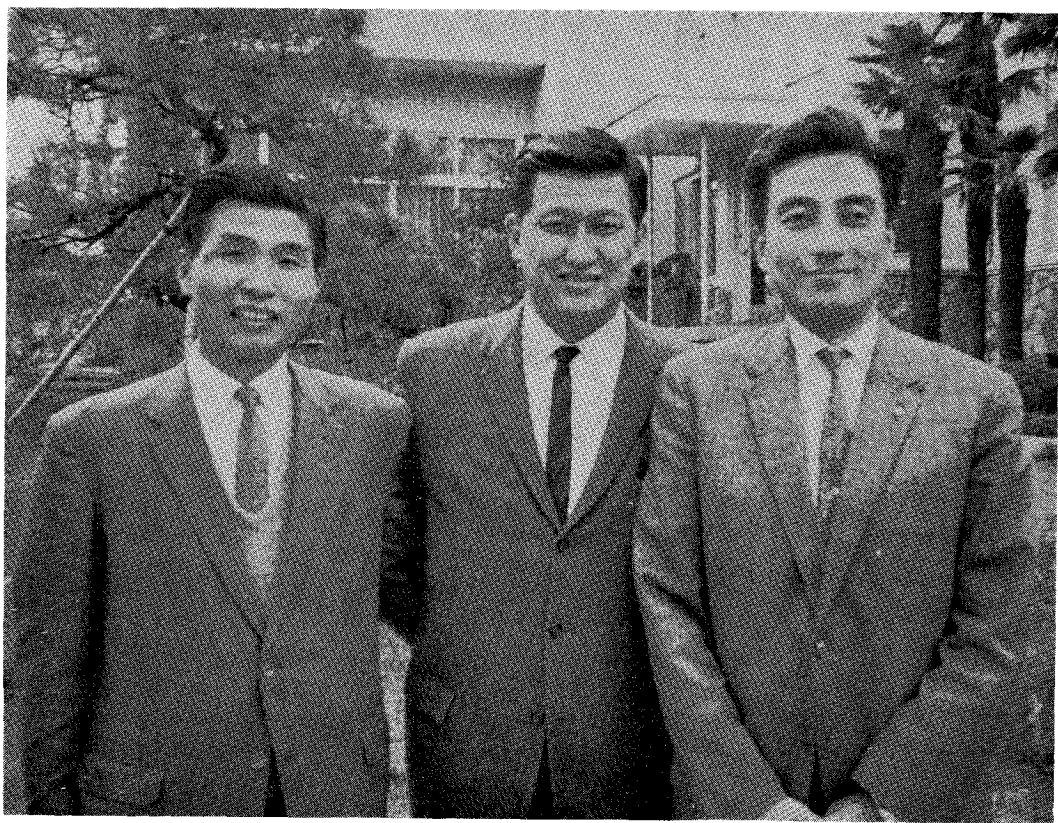
1958年3月17日第3種郵便物認可（毎月1回1日発行）第10巻第12号 1966年12月1日発行

聖徒の道

12

VOL. 10 No. 12





山田第一副伝道長感謝の解任

10月30日、大阪阿部野支部で開かれた西中央地方部大会において、長いあいだ第一副伝道部長として活躍された山田五郎兄弟が解任されました。山田兄弟はアンダーセン伝道部長、小松伝道部長のもとでよきカウセラーぶりを発揮され、活発に主の御業のために奉仕されてきましたが、このたびカナダへ移住されることになり、その責任を解かれました。

渡辺兄弟第一副伝道部長

田中兄弟第二副伝道部長

に召される

第一副伝道部長の後任には、第二副伝道部長の渡辺驩兄弟が任命され、第二副伝

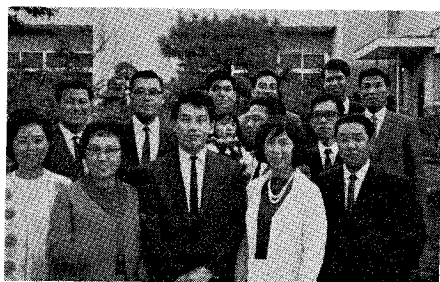
道部長には、東中央地方部長田中健治兄弟が任命されました。新しく伝道部長会に入られた田中健治兄弟は、東中央地方部長として活躍してこれ、火の出るような闘志と優れた霊力を持っておられる方です。

地方部長セミナー開かれる

11月5～6日、東京麻布にある北部極東伝道本部に於て、北部極東伝道部内地方部長セミナーが開かれました。北海道地方部長柳沢俊雄兄弟、西中央地方部長鈴木

木正三兄弟、東中央地方部柏倉仁兄弟と三人の伝道部長会、それに各補助組織の伝道部役員が集まって、熱心に会議を続けました。とくに1967年度はホーム・ティーチングに重点が置かれるために、その説明が小松伝道部長から詳しうなされ、それぞれに強い力を得て帰って行きました。

↑
新伝道部長会
左から渡辺第一副
伝道部長、小松伝
道部長、田中第二
副伝道部長



＜予言者のことば＞何か願いがあるか……………デビッド・O・マッケイ…………	2
＜伝道部長会メッセージ＞……………アドニー・Y・小松	
渡 辺 驩	
田 中 健 治…………	5
なにか不足していませんか……………マリオン・D・ハンクス…………	8
＜クリスマス特集＞もう一人の博士……………山 田 五 郎…………	19
ほんとうのクリスマスの話……………	10
クリスマスに思う……………渡 部 正 雄…………	22
ユダに降る星……………高 橋 実…………	24
＜系図のページ＞……………	33
＜扶助協会レッスン＞……………	35
＜家族のタテキスト＞……………	29

聖 徒 の 道 10 巻 12 号

1966 年 12 月 1 日



何か願いがあるか

デビッド・O・マッケイ

イエスはふり向き、彼らがついてくるのを見て言われた「何か願いがあるのか」彼らは言った、「ラビ……どこにおとまりなのですか？」

イエスは彼らに言われた。「きてごらんなさい。そしたらわかるだろう。」

(ヨハネ伝一・三八―三九)

何か願いがあるのか？ ラビ……どこにおとまりなのですか？ きてごらんなさい。そしたらわかるだろう。

この三つの重要な表現は恐らく救主が試みの山から戻ってすぐ言われたものでありましょう。何か願いがあるのか？ は救主が民衆に働らきかけた最初の言葉として記録されてあります。どこにおとまりなのですか？ はバプテスマのヨハネの二人の弟子によつてたずねられたのですがそれはまぎれもなくアンデレとヨハネであります。

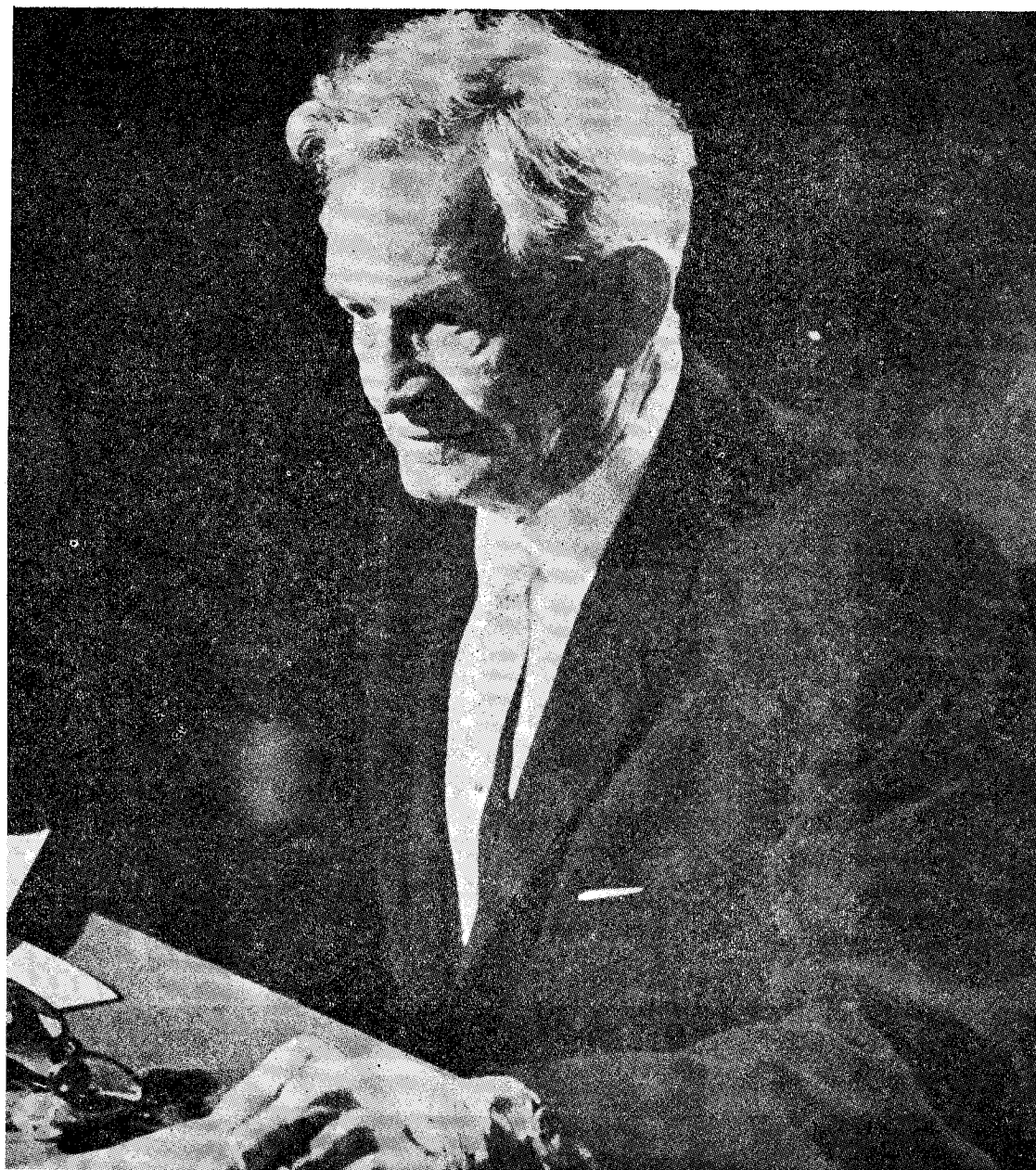
この二番目の質問に私は次のような意味を読みます。ラビ、何処で私たちは

救主を見出すことができるでしょうか？ 何処で私たちはローマの在囚から解放されるでしょうか？ 或はまた私たちの時代の悪から解放されるでしょうか？ ともなり得るでしょう。救主の答えは最も重要であります。もしも私自身の言葉を入れることを許されるなら私は、きてごらんなさい。そしたらわかるだろう。の中に次のような事実を読みます。若しもあなたが私に従うなら、あなた自らがその道を見出すであらう。

このテキストに注意を喚起する私の目的はこれらの質問を今日の世界に適用しようとするものであります。人の子が今日の人類に、何か願いがあるのか？ とたずねられたとしたらその答えはどうなるでしょうか？ 多くの人が、私たちは快樂を求めていると言ひ或者は富と言ひ他の者は又名誉及び権力と言ひでしよう。けれどもよく考えた人は、私たちは時代の光を求めている。私たちは理想郷を求めている。私たちは人類の或疾病から解放された社会を求めている。又人生の悩みと労苦から解放された社会を求めているとなるであります。

この世のすべての進歩した時代に高貴な心を持った知的指導者は、その時代よりも、よりよい生き方を求めました。善い人生、社会的なユートピアがその時代の要求でありました。

改革の必要を感じることは容易でありましたが、それを達成することは難かし



く、ほとんど不可能にちかかったのであります。最も賢明な人々の考えは、あまり実際のでなく、屢々空想的でありました。けれども殆んどの場合この世は概して新しい思想を広めることによって向上しておるのであります。勿論時には経験を通じて失敗が証明されることもありませんが、この点に関して過去一世紀間にも例外ではありません。

十九世紀の前半は全般的な社会不安をもつて特長づけられました。観察者たちは社会的及び経済的狀態に満足せず思想家たちはその改革を求めました。今世紀の初めにフランスに於てはチャールス・フォアリーの空想論が流布されました。彼はこの地球及び人類の将来の歴史を八千年間に亘つて概説しようとしてました。今日彼の書物は読まれてもおりません。ロバート・オウエンはインディアナのニューハーモニーに商業社会を建設しました。彼はその知恵と素質と努力によって集めた財産を以て支持したその後援者となったセント公によって励まされましたが、彼の人類向上の計画は一八二七年に無に帰しました。彼は英国に帰り幾度が同様の経験をしましたが同様の結果に終りました。

ユニテリアン派の牧師、ジョージ・リプレイは、深い生活と高い思想、計画を考えました。彼は有能なナサニエル・ハウソーン、後にアメリカ合衆国防次官になったチャールス・A・ダナ及びジョ

ン・S・ドワイトらの協力を得ました。リプレイの衝動は経済的というより実には宗教的であり、新しい社会を望むというよりもむしろ卑しい社会から逃避しようとする修道院的なものでありました。彼と彼の協力者は、この世を住みよい処にするための、大いなる模範と言われた、小川の農場として知られた、ブルー・ファームの創設者となりました。それは一八四六年に終了しました。フィリップ・ラッセルは書いております。

これらの集団の或ものは宗教的な、また他のものは教育的な更にまた他のものは経済的な目的を持っておりました。けれどもブルー・ファームを含めてすべてこれらのものは過度に張りつめたアメリカの欠陥を示す急速な成長の社会的徴候でありました。

この回復された教会も皮肉な著者たちによって、この宗教的社会を反映する政策の発酵体となった余計なものであると非難されて来ました。

宗教的な騒ぎがジョセフ・スミスをして、正しい教会、正しい礼拝の様式、正しい生き方を求めさせたことは事実であります。これを知りたいという望みがこの少年をして一八二〇年春に、知恵のために主に求めさせ、彼の祈りへ答えての大いなる結果は一八三〇年四月六日火曜日にピーター・ホイットマー（初代）の家に於ての教会の組織となったのであ

ります。

教会を社会の欠陥を改善するとか人類の進歩を図るなどの目的を持った他の価値ある組織と同様の目的を持った単なる社会組織と考えようとするとき最初からその心に留めておかねばならない次のような事実があります。

先ずジョセフ・スミスは学校教育も受けず、人々と知己となることもまた物事に通じることありませんでした。疑いもなく彼は、フォリヤの集団に就てたオウエンの経験、その他、社会の状態をよくしようとする宗教的、経済的、如何なる計画に就ても聞いたことはありませんでした。

二番目に六人の最初の会員たちは実際に名も知られない財政的にも貧しい、また政治的或は経済的基盤もありませんでした。

三番目にジョセフ・スミスは人の知恵でなく神性な指示によって、新約聖書に記録されてある教会の秩序に従って、教会を組織しました。

団体の権威を代表する政府は通常、外部から強圧的な方法で団体の意志を各会員に強制します。正義の統治、社会の安定福祉、団体の繁栄向上を目的とする政府は最上であります。

政治的に見るときに、今日の世界は、その考えに於て最上の政体と反対であります。

殆んどの国民が現在持っている政体よ

り以上のものを求めていることは確かであります。彼らは独裁者による政府或は民による政府或はまたその両者の結合による政府にそれを見出すでしょうか？

さて私の同僚たちまた、世の思慮ある人、正直な人たちの皆さん、其の政府の基本的な定義をとって、如何にイエス・キリストの教会が見事にそれに一致しているかを御覧になって下さい。教会組織の周到な分析は、それが強力な中央政府と民主主義のすべての徳と必要な安全保障のすべての力を備えている事実を現すであります。

第一にそれは牧師の世俗的策略なしに神権の権能を持つて、すべての価値ある人が統治主体の中に地位を占め声を持つ資格があるのであります。

第二にそれは真の民主主義の精神と力の安全弁であるそして普遍的に自由に適用される教育体系を提供します。

第三にそれは貧者にもまた百万長者にも適用される。正義と平等の原則をすべての人に等しく及び司法体系を提供します。

第四にその教会集団、ステーク部、ワード部、支部及び地方部がそれぞれ地方的な団体として、それ自体のことを達成できるだけ能率と進歩が高められ、而も各々が中央統治体によってその手続きのすべての様式が全団体を善くするため遅滞なく採用され、人々にとって有用且便益なものであることが証明される程、親

密に結合しておるのであります。

真に能率と進歩を高める見地からキリストの教会は今日各国が求めている処の政体を持っているのであります。これはキリスト自身が設定した秩序であるからであります。

末日聖徒イエス・キリスト教会は、その内にこの世が要求しているすべてを持っております。私は私たちの宗教的な政府を以て政治的な政府に連結させるものではありません。私は只人に對する神の啓示によって設定された組織の体系に就て指摘しているのであります。

未来はどうですか？。きてごらん下さい。そしたらわかるだろう。豊かな生涯、美しい笑いの生涯。より多い兄弟愛、平和確保、よりよい社会関係などはこの世が求めている事実の一部であります。誠に教会はその道を示すべきであります。

神は私たちがこの光を世にもたらす使命を遂行できるように私たちを助けてくれます。私たちは天に行われるとおり地にも行われますような神のみこころがその内に実在するような社会秩序を設定するため、今迄より一層、勤勉に働こうではありませんか、それは人の兄弟愛をはぐくみ、神の父性を認めさせる神の御国であります。ですから私たちは人々が私たちのよいおこないを見て、天にいます私たちの父をあがめるような生活を致しましょう。

伝道部長会メッセージ



アドニー・Y・小松

(伝道部長)

愛する兄弟姉妹のみなさん

クリスマスのシーズンが近づいて来ますので私たちは私たちの思いや行いが、救主イエス・キリストの教えを反映しているかどうか確かめて見ましょう。

キリストの精神なくしては末日は意味のないものであります。

末日聖徒として私たちは、このクリスマス季節をイエス・キリストの永遠の福音を回復すべく天父によって選ばれた、私たちの予言者ジョセフ・スミス誕生、千八百五十二年十二月二十三日のためにも二重の感謝をすべきであります。

あなたがクリスマスの準備をするときその心を充分な愛を以って、すべての人に向け、また数多くの祝福を数えあげて見ましょう。伝道部長会並に伝道地及び

悲しみの人で、病を知っていた。また顔をおおって忌みきらわれる者のように、彼は侮られた。われわれも彼を尊ばなかった。

けれどもイエス・キリストは神でありました。

私たちはクリスマスを祝うに当って、彼の真実の姿、即ち彼の正体に心せねばなりません。単なるベツレヘムの赤子と思うべきではありません。また単なる一人の大功として或はユダヤ人の間の教師として考えるべきではありません。彼を単なる遺された寡婦の慰め主として或は悔改めた罪の女を助ける者として考えるべきではありません。

彼を、神性な神の息子……神として考えましょう。

このクリスマスの時期に世俗の習慣をしてクリスマスの意義を見失わせないようにしましょう。私たちの贈物のやりとりをして神の最大な贈物をあいまいなものにさせないようにしましょう。私たちの持っているすべて、またこの世の中で受けられるどんなよいものでもこのイエスからもたらされることを私たちが豊富な慰安に充たされた生活の中で忘れてしまふようなことのないようにしましょう。

ベツレヘムの赤子は世の創造主でありました。

すべてのものは、彼によってできた。できたもののうち、一つとして彼によらないものはなかった。と使徒ヨハネは証しております。

イエスは至高者の息子であるばかりでなく、彼自身神会を構成している一員であります。ですからヨハネは述べております。

初めに言があった、言は神と共にあった。言は神であった。

彼は彼の御父の指示の下に、すべてのものの創造に働きました。彼は彼自身及び彼の御父からの、すべての人への贈物としてこの地上に來たのであります。

それから彼は昇天され御父の側の御座に坐られたのであります。

神は、むかしは予言者たちにより、いろいろなときに、いろいろな方法で先祖たちに語られたが、この終りのときには御子によって、わたしたちに語られたのである。神は御子を万物の相続者と定めまた御子によって、もろもろの世界を造られた。

御子は神の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿であって、その力ある言葉をもって万物を保っておられる。そして罪のきよめのわざをなし終えてから、いと高き所にいます大能者の右に、座につかれたのである。

これが飼馬桶に生れたイエスであります。これが私たちが覚えておかねばならないイエスであります。彼は救主であります。

創造主であり、私たちの贖主であります。彼は私たちの長兄であります。私たちに對するまた御父に對する愛から彼は御父の救いの計画に従って、彼自身を私たちのための罪の贖いとして捧げたのであります。彼は彼自らを、真のクリスマスのご贈物として与えたのであります。そして彼の御父もこの贈物に彼と結合したのであります。私たちは聖文が次のように述べているのを思ひます。

神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで永遠の命を得るためである。

神の贈物は私たちがまだ充分に理解できない程偉大であります。

しかし彼はわれわれの故のために傷つけられ

われわれの不義のために砕かれたのだ

彼はみずから怒らしめをうけて

われわれに平安を与え

その打たれた傷によって、

われわれはいやされたのだ。

この贈物は無限の贈物であります。けれども私たちがそれを受けない限り無価値なものであり、その受入れは私たちが贈物である神の救いの計画を受入れることを含みます。このことを心に留めて神は私たちにその罪を悔改めて彼に従うように求めておられます。彼は言っております。

われは、イエス・キリストなり。われは父の御こころによりて来り、その御こころを為す。

彼が父の御こころを為すからには、私たちは彼の御こころを為さねばなりません。私たちは進んで彼のクリスマスのご贈物を受入れ、生活しますか？ それともしりぞけますか？

見よ、われは神なるに、人もし悔い改むるならばこの苦しみを受けざらんがために、すべての者に代りてこの苦しみをわが身に受けたり。

されど、人もし悔い改めずば誠にわれ

愛する兄弟姉妹みなさん

渡

辺

驥 (第一副伝道部長)

千八百二十九年の二月に、主は予言者ジョセフ・スミスを通して、導きと教えを与える職に働く人々の資格について啓示を与え、私たちが如何に主の御業に専念すべきかを教えました。

「さて見よ、一つの驚嘆すべき業、まさに人の子らの中に現われんとす。この故に、汝ら神の役務に出で立たんとする者は、終りの日に臨みて神の前に咎なくして立たんため、すべからず心をつくし、勢力をつくし、思をつくし、体力をつくして神の役務をなせ。されば汝らもし神に仕えんと望むならば、汝ら神の業

と同じ苦しみを受けざるべからず。

その苦しみのや、われ神、すなわちすべての中最も大いなる者なりといえども痛苦のために身をふるわせ、あらゆる毛の孔より血を湧かせ、身と霊とふたつながらを苦しめ。

クリスマスは救いを意味します。

救いはキリストを通じてもたらされませんが只私たちが、すべての贈物の内で最大で最も望ましい贈物として手を差し伸べて、それを受入れるときにのみ、それは私たちのものとなりますのであります。

に召さるるなり。そは、見よ神は早白くして刈り入れを待つが故なり。また見よ勢力をつくして鎌を入るる者は、亡びずしてその身も霊も救いを得るために庫に積み入るるなり。神の栄光をまごころもって仰ぎみて、信仰、希望、慈悲、仁愛の徳を有つ者は、神の業に仕うる資格あり。信仰、徳行、知識、節制、忍耐、兄弟の親切、敬虔、慈悲、謙遜、勤勉などの諸徳を忘るることなかれ。求めよ、さらば与えらん、叩けよ、さらば開かるることを得ん。アーメン。」(教義と聖約、第四章)

以上の聖句に思いをはせるとともに、新たに召された第一副伝道部長という大切な召しについて考えてみると、思わず知らず身がひきしまり、「心をつくして主に依り頼まねばならない」(シンゲン、第三章五節)と深く痛感させられます。ときあたかも神権相互関係調整プログラムの実施段階に当り、私は小松伝道部長のよき手足となつて、田中副伝道部長と共に当伝道部の皆様方のために誠心誠意働く所存であります。それ故、旧倍の御指導と御鞭撻の程を御願ひ致しますと共に私たち伝道部の会員が一人残らず心を合せて、パウロがコリントの人たちに書き送った一致協力の精神をスローガンとしてそれぞれのつとめをよく果し、主の教会をこの地に確立しようではありませんか。

「からだ一つであっても肢体は多くあり、また、からだのすべての肢体が多くあつても、からだは一つであるように、クリスマスの場合も同様である。なぜならわたしたちは皆、ユダヤ人もギリシヤ人も、どれいも自由人も、一つのみによつて、一つのからだとなるようにバプテスマを受け、そして皆一つの命をのんだからである。実際、からだは一つの肢体だけではなく、多くのものからできている。もし足が、わたしは手ではないから、からだに属していないと云つても、それからだに属さないわけではない。また、もし耳が、わたしは目で

はないから、からだに属していないと云つても、それで、からだに属さないわけではない。もしからだ全体が目だとすれば、どこで聞くのか。もし、からだ全体が耳だとすれば、どこでかくのか。そこで神は御旨のままに、肢体をそれぞれ、からだに備えられたのである。もし、すべてのものが一つの肢体なら、どこにからだがあるのか。ところが実際、肢体は多くあるが、からだは一つなのである。目は手にむかつて「おまえはいらない」とは云えず、また頭は足にむかつて「おまえはいらない」とも云えない。そうではなく、むしろ、からだのうちで他よりも弱く見える肢体が、かえって必要なの

愛する兄弟姉妹のみなさん

田 中 健 治 (第二副伝道部長)

新しい責任に召しを頂き感謝とおそれで一杯になっております。主の召しは、それを謙遜に熱心に魂しいをこめて努めるならば必ず果すことが出来るに違いないとの希望が私の心を引き立ててはいますが、一方至らぬことの多き、愛と知識の不足がますます省みられるこの頃の気持は、果すべき勤めの重さに警くのです。兄弟姉妹の方々の御指導と御鞭撻をお願い致します。

今日私のオフィスの机に一枚の白い角

であり、からだのうちで、他よりも見劣りがすると思えるところに、ものを着せていっそう見よくする。うるわしくない部分はいっそううるわしくするが、うるわしい部分はそうする必要がない。神は劣っている部分をいっそう見よくして、からだに調和をお与えになったのである。それは、からだの中に分裂がなく、それぞれの肢体が互にいたわり合うためなのである。もし一つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな共に悩み、一つの肢体が尊ばれると、ほかの肢体もみな共に喜ぶ。あなたがたはキリストのからだであり、ひとりびとりはその肢体である。」(コリント人への第一の手紙第十二章、十二―二十七節)

封筒が届けられました。航空便、との赤いスタンプが横文字の上に押されてありました。ソルトレークの系図協会からのものです。直ちに封を切った眼に、私の家のGシートが私の書き込んだ字のまま飛込んで参りました。拡げて見ますと右端に神殿で行はれた儀式の証明が貼付されていました。シーリング——(愛する)妻との永遠の結婚——証人アドニ・Y・コマツ——リビング(生存中)——(愛する息子)との——親子の

結び固め——リビング(生存中)——これらの僅かな数のタイプ文字は一瞬に私を遙かな思いへ運んで行きました。何も分らず高ぶった気持で始めて宣教師と対した十数年前のコンタクトより今迄の間に受けた恵みの多くと、乗越えることの出来た数多くの困難の今はかえって懐しい思いが、神様の輝かしい存在を示してハワイの神殿の光景と重なっていました。この世の生活を神様の存在の実感の上に築けることは何と言う幸福でありましょうか。夜遅く我家に帰りついたとき、の楽しみの最大なものは安らかに眠る子供の成長した顔を眺めることであり、妻から彼らは何んと寝る前の祈りをしたか、また昼間あったケツ作な失敗や遂に克服した弱点を聞き出すことです。彼らが高い望みに近づくよう話し合う無限の話題は何と私の妻を素晴らしい見せて呉れることでしょうか、弱点、不十分の多い人間同志でありながらこのような幸を与えて下さる救の計画はまだ多くの人が聞く筈です。どのような教会の務めも主によって組合されてはじめて意味をもつものです。そのリーダーとして神様は小松伝道部長と御家族をお送り下さいました。彼の人格、愛、忍耐、信仰、忠実希望、注意深さ、正確さ、ごまかしのない厳しさ、家族の結びつき等はそのまま私たちの模範です。それにもまして彼を通して与えられる大管長よりの神様の指示の重要さと靈感に感謝しております。

す。一生懸命に身も心もつくして或時期に誰でもがなすべきつとめに励みます。教会のやり方、神様のやり方が本当に喜んで受けられるようになりたい。福千年に驚くことのないステーク部が建設されることを望んで毎日をつとめる覚悟です。

短い期間でしたが東中央地方部の発展のために陰になり日向になり御国建設の土台となつて下さった全ての兄弟姉妹に大きな声で感謝致します。ありがとうございます。あなたがた一人一人思うときいつも感動を禁ずることは出来ません。どんなに励まされたことでしょうか。多分私の知らない所での努力はどんなにか大きなものだったと存じます。ありがとうございます。そして神様から、かけ替のない喜びを直接お受けになつておられることお喜び致します。

我等の国籍は天にあり。

また辛い思いをおかけしたり不満も沢山あるはずでしょう、まだまだ理解して頂けないこともあると存じますが、許して下さいようお願い致します。しかし新しい地方部長会によって更に神の国が近くなることは疑う余地がありません。

終りに連日十一時、十二時迄本部にあつて指導して下さい山田五郎兄弟に感謝しました新しいカナダでの御仕事の成功と御家族の御幸福をお祈りしやがて帰国されて更に指導をつづけて下さるようお願い致します。

なにか不足していませんか

阿倍野支部献堂式における説教

マリオン・D・ハンクス長老



愛する兄弟姉妹の皆様、今日こうして大阪の地で皆様と一緒に集うことは私の喜びであり特権であります。私は以前から大阪だとか春雄だとかまた他に多くの興味ある名を耳にして来ましたので特にこの機会を喜んでいきます。ハンクス姉妹は以前日本と両親について話した時こみあげる涙のため話をするのができませんでした。幾年も前に姉妹の両親が歩いた道を見ることができるようにも姉妹の喜びとするとところで。また私は主の代表として予言者より任命を受けて皆様を訪れることができ感謝します。昨年日本にまゐりましてから日本について観察し、そこには日本の美、美しい花、美しい音楽と共にカメラを見ました。また多くの古

いまた新しい建物を見ました。道を歩くと多くの立派な工事中の建物を見ます。しかし私は、この立派な国の建物の中、末日聖徒の教会堂ほど重大な意義をもって建てられたものは他にないと言えるのは私たちの信じるところであることをへりくだって申し上げます。この建物に於て神の子供たちが集い、謙遜に、そして祈りをささげるのです。市道支部長やラーセン監督や他の人が自分の時間と犠牲を省みず働いたことを心から称えるものです。この建物は貴方や、子供やまだ生まれていない他々の子孫にまで恵みを与えます。神の宮として敬い尊びを正しく利用して下さい。私は世界中の教会の献堂式に出席する機会にあづかります。そし

て私が教会の幹部に召された始めの四十八ヶ月（四年）の間に世界にある四十八の教会を献堂することが出来ました。この建物の建築にあたって努力をなしたまたは犠牲をなしたすべての会員は、全世界のいたる所で同じように犠牲を払って努力している会員がいることを知りまた犠牲と努力を理解してくれる人がいるのです。私には六才の男の子がおりますので他の男の子のためすることに興味を持っています。私の子供と同じ年位の男の子がある時お祖父さんの所へ行きました。子供は大きなコリー犬を連れていました。お祖父さんの所へ行くとお祖父さんは「やあ来たな、僕の友だちは誰だい？」と言いました。子供は何のことだか良くわからなかったので返事に困り「殆んど誰れでもだよ」と答えました。これと同じ様に私たちは教会員以外の人に言えるのです。その人たちは私たち同様に神の子供である以上興味を持ち感謝の念をよめます。そして論争や優越感を持つのでなく友情と愛と博愛とを持って迎えるのです。教会員を兄弟、姉妹として扱うように私たちは教会外の人をも扱いそれ以上の扱いをしなければなりません。それらの人々の徳を称え善を賞めるのです。神が私たちに与えて下さったものを寛大に愛をもって分か合うのです。では、神はこの教会に何を与えたのでしょうか？

数年前私はアメリカのある大学に招か

れて、世の宗教に関する研究週間でそれぞれの宗派を代表して話し、私はこの教会を代表して行きました。私の責任はこの週を始めるにあたって学生自治会に講演することでした。が大学へ着いた時自分か話そうとすることを、どうして切りだしたら良いか迷っていました。講堂に入る前にちよつと立ち止まって考えるところある学生が書いた「自動車売りもの」の文を目にしました。それを読んで私は話しの主題をきめました。広告文は「売物ノ新しいタイヤ、エンジンなしノ二十五ドル」。そこで学生に話した主題は「何が不足している」と言うことでした。その車に欠けていたものは車としての使命をはたす最も重要な部分でした。エンジンはなくとも外観は良く見え使えるかのようにでした。が作られた本来の目的のために用いることは出来ません。そこで私は学生に個人と生活と言うことを話しました。多くの人は新しい服を着てきれいな靴をはきあるいはいいお金になる仕事をもっています。それらの人々は見たところ何の差障りもなくうまくいっているかのように見えます。が生活の中に何か欠けており、人が造られた目的のために重要なことを失っています。全能の神の子供として為すべきことをしていません。そして神の王国を求めることなくまず物質的満足を求めています。人々は神についてまた自分について

そして生活についての本当の意味を探し求めようとしません。

また深く考えず、探究せずまた折らずして教えられたことを受け入れて仕舞います。神は私たちを愛するようにこれらの人々をも愛し、そのような人たちも神の子供ですから学ぶべきことを学ぶように教えまた話したいのです。その目的で予言者をおし人々に真理、人に知って欲しいこと、を教えるようにしているのですが人は興味を持たず聞こうとしません。人と真理に関するかぎり、このようなことは別に耳新しいことではありません。大勢の中少数の人のみが本当に生きる目的と意義を探し求めます。他の人は、ただ生きる、生きるのびることだけで満足しています。紀元前七〇〇年予言者イザヤは当時のことをこのように言っています。「彼らはそむける民、偽りを言う子ら、主の教えを聞こうとしないからだ。彼らは先見者にむかつて『見るな』と言い、予言者にむかつては『正しい事をわれわれに預言するな、耳に聞きよいことを語れ、迷わしごとを預言せよ。』と。当時の人々は犠牲や努力を要することは聞きながら利個主義に走り自分たちの生活を思うがままに振舞っていました。しかし私たちがこの世にいる目的はそのようなものではなく、父なる神と自分自身とそして聖い神の独り子、人類を贖うためにお亡くなりになった長兄についての真理を学ぶためでありまた、生活の意味を

学び威厳と尊敬の念と広い愛を持って同胞と共に生きることを学ぶのです。

人々は知らなければならぬ重要な問題を本当に知りたがらず、そしてそのような人は比較的幸福で満足した生活をしていると思っていました。実際はそうではないことがわかりました。全ての人は神と人との関係を知りたいという願いを心の奥深いところに持っています。

昨日宣教師の一人はアイダホ州のある大学生であったことを聞きました。この大学で数週間前に起きた出来事を話して私の言わんとする意味を伝えましょう。その大学には自分の教える分野に於て非常に優秀で博識な教授がいました。その名はアメリカ中におよびいたる所で講演し彼の能力は国中に広がりました。しかし彼は神を信じないと公けに宣言していましたが個人的に立派な人で深く善良な生活をしていました。

ある時この教授はその近くに住む若い一人のモルモン学生、この人は教会の宗教教育をしていた、と知り合うようになりますが、年令は教授の半分程しかなく教授のように学識上の称号もなくただ持っていたのは神を信ずる信仰と回復された福音の証詞だけでした。深く誠実な若者を見て教授は好感を持つようになり機会をもうけて話し合うようになったある晩のこと、若いモルモン学生の家で電話が鳴り出てみるとそれは教授からでしたが何を言っているのか聞きとるこ

とができない程がよい声でしたが、はつきりしていることは教授は病気で急いで来て欲しいと言っていることでした。

急いで行ってみると毒をのんで苦しみ虫の息だったのでとりあえず電話で医者（医者もモルモン）を呼びましたら、医者は毒が入っていた瓶に何と書いてあるか読むようにと言いい、何が書いてあるかを聞いた医者は、その毒ではそこに行くまでとても持たないと悲しげに言いました。何や言わんとしている教授のベットの側にひざまづいて顔を寄せると、哀れむべき言葉が聞えて来ました。教授は「もう私は駄目だ、死ぬ前にどうしても言っておきたいことがあるが貴方にだけが証人として聞いてもらいたい。妻や子供ではなく貴方に聞いてもらいたい。私を知っている中で貴方だけが信頼できる誠実な人だから。私にはなぜ重要に思えるのか解りませんが、やがて逢う御方の所へ行く前に、貴方に知って欲しいのは、『私は神に信じています』と言うことです。』と。同じように、この世には本当に何が不足しているのかを知らずに生活している人がどれほどいるか知りませんが、確かなことは、何かが欠けていることを皆それぞれ自覚しています。教義と聖約から学ぶように、多くの人は心の空しさを物質的なものあるいは造られたものを与えることによって満足させています。彼らは主の義を打建てんために主を求めずして、あらゆる者おのが心のま

まに振舞いおのれらの神の姿を求めれども、その姿は人の世の像にしてその本質は一個の偶像なり。（教義と聖約一章十六節）このことを心にとめて十四節を見ると、主の声もまた主の僕らの声も聞かんとせず、予言者にして使徒なる者たちの言にも耳傾けんとせざる……。

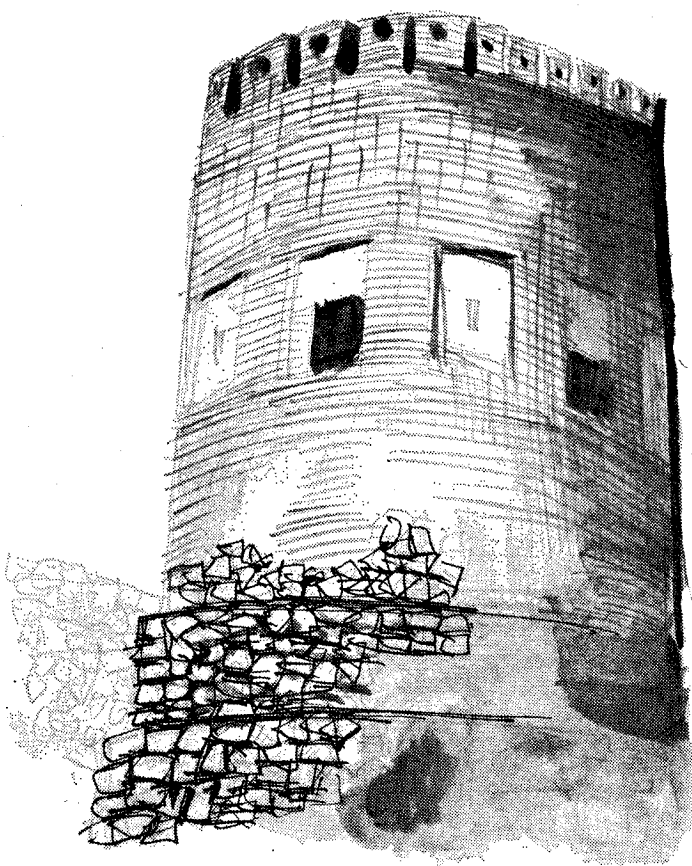
人々は主の義を建てるようとして主を求めず、すべての人は心のままに振舞い、神の姿を求めても、その姿は人の世のものでありその本質は一つの偶像であります。直理は、神は私たちの天の父、であることです。私たちは神の姿に似て造られ、神は私たちの父であり私たちは神の子供たちです。イエスは、神とキリストのことを知る意味は永遠の生命を得ることであると述べておいでになる程、この教えは大切なものです。

しかし乍ら私たちはただ生きるだけであれば朝起きて食事をし、仕事をして家に帰りテレビでも見て、あるいは稀に本を読みそして寝て、一日そして次の日を仰えることが出来ます。

神は私たちに何を信じ何を為すべきかを教えたのみでなく、どの道をどうやってまた、幸福に至る道へはどのようにしたどりつくことができるかを、道しるべとして教えました。神は心の恩に関する真理を教え、人は無智にして救われることと不可能なり、でありまた、神の栄光は英智なり、あります。

ほんとう の クリスマス の 話

クリスマス特集 その2



キリストの降誕をお祝いした文字通りはじめてのクリスマスほど感激的なクリスマスはかつてなかった。しかしながら奇妙なことに、その最初のクリスマスのことを完全に語っている歴史はほとんど見あたらない。現在クリスマスの時に見られる大さわぎが告げていないクリスマス真相が、聖書の中にうずもれて忘れられてしまっている。この一文を書いた目的は歴史の記録にのこされている通りにほんとうのクリスマスを語ることである。

「歴史的背景」

はじめに、キリストがお生れになった当時、ユダヤがローマの占領下にあったことを忘れてはなるまい。キリストの降誕より約六十年前にエルサレムはローマ軍の戦車にじゅうりんされ、敵将ポムペイはローマの軍旗をシオン山の上にたてた。

その後ひきつづきユダヤはローマ軍の占領するところとなっていたが、ついにアウグスタス、シーザーは、ぎんにんでる賢い一人のアラビヤ人を権力の座についてユダヤ国民を統治させた。その男の名はヘロデ、ユダヤの民は彼をヘロデ大王と呼んだ。

ヘロデはおもてむきユダヤ教に改宗したようなふりをした。そして、壮大な神殿を建てる事業を始めた。彼はユダヤ人であるマリヤムネをたてて王妃としたが、その間に生れた二人の男の子にけっ

して自分のあとをつがせなかった。そして自分の王座を守るために人殺しさえあえてしたが、ユダヤ人たちが王妃マリヤムネとユダヤ人の血をひいている二人の息子たちを熱狂して迎えることを見るや、命を下して三人とも暗殺させてしまった。ヘロデの狂したこのような悪い行いやそのほかの罪をみてユダヤの民はこころの底から彼をいやしんだのであった。

「ほんとうのクリスマスの話は神殿から始まる」

ローマ暦七百五十二年、ヘロデが六十才をこしたときに新しい神殿の中心部はまったくできあがった。「ほんとうのクリスマス」の話はこの神殿の中からはじまる。

ある日のこと、昔のレビ人の祭司が一人、祭壇のところで務めを行うために神殿へきた。この祭司はザカリヤという名の人であったが、多くの民衆がそとで待っているあいだ、祭壇のある聖所へ入って香をたいていた。ザカリヤは聖所に一人だけ立っていたが、彼のま正面には神聖な幕があつて、そのうしろには「至聖所」があつた。そして幕の前には黄金の祭壇があり、その上の香炉の中には昨夜たいた香ののこり火があつた。右手の方にはそなえのパンの卓があり、左手の方には黄金の燭台があつて、部屋の中にあるあかりはこれだけであつた。

ザカリヤはこの日神殿へきて祭司のつ

とめを行っていたが、彼のむねのなかにはながい間熱心に祈りもとめていた一つのねがいがあつた。ザカリヤには子どもがなかった。彼は男の子をぜひ授かりたいと熱心にねがっていたのであつた。ザカリヤもその妻も今は年老いて子どもを授かるのぞみもなくなっていたが、それでも、それまでの習慣で彼はなお熱心に祈りを神にささげていた。彼が香壇に近づいたとき、彼のこころの中にあつたものとも切実なねがいはこのことであつた。

そのときザカリヤはとつぜん止まった。彼の目は、聖所の中のかすかなあかりを圧倒するかがやきをもつてあらわれたお方のためにくらんでしまった。一人の御使が香壇の右に立っていた。そしてそのまわりは強烈な聖光にひかりかがやいていた。

そのときを去る過去四百年の間に一度もなかった神の啓示が、このときはじめてユダヤ人の一祭司に下つたのであつた。

「クリスマスを告げる使いがはじめてあらわれた」

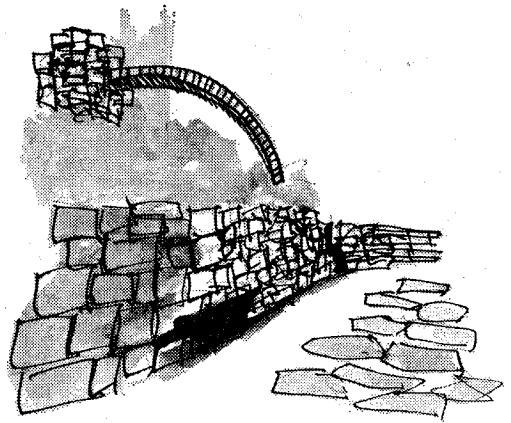
このときザカリヤはおそれおののいてその場をさがりはじめたところ、その御使いは「おそれるなザカリヤよ、あなたの祈りが聞き入れられたのだ。あなたの妻エリザベツは男の子を産むであろう。その子をヨハネと名づけなさい」と言った。このことばを聞いて、けんそんなレ

ビの祭司ザカリヤは自分の耳を信ずることができなかった。しかし、御使いはつづけて言った「彼は主のみまえに大いなる者となり……ととのえられた民を主に備えるであろう」と。

これはザカリヤにとってとんでもないことであつた。彼の年老いた妻が男の子をもうけることがあるだろうか。そんなことのあるはずがない。彼の妻は年をとりにすぎている。このような疑惑の念を抱いてザカリヤは御使いに挑戦した「どうしてそんなことが私にわかるでしょう。私は老人ですし、妻も年をとっています」と。

ザカリヤを見おろした御使いのまなざしは永遠のように深いまなざしであつたにちがいない。ザカリヤよ、なんじは神の力をうたがうのか。なんじはサムソンの母、サムエルの母、イサクの母のことを忘れたのか……これらの母はみな天からとくべつの祝福をさずかつてその子を産んだのではないか。さもなければ、なんじは御使いの権能にうたがいを抱くのか。

その御使いはおごそかな調子でザカリヤをせめて言った「私は神の前に立つがブリエルであつて、このよるこばしい知らせをあなたに語りつたえるためにつかわされたものである。ときがくれば成就するわたしのことばを信じなかつたから、あなたはおしになり、このことの起る日までものが言えなくなる」と。



そう言ってしまうと、すぐ御使は行つてしまった。

ザカリヤはおどろきのあまり気がとろくなつたような状態で、やっと自分の務めである香をたきかかった。そして、香のけむりがへだての幕の上へのぼったときに、レビの祭司ザカリヤは民衆の前に出てきた。

なぜこんなにながいが間かかったか。ザカリヤはそのわけを言おうとしたが、ものを言うことができなかった。ザカリヤは手まねでもって、聖所のなかで神の示現があらわれたことを民衆にわからせ

た。
「忘れられた王家のすえの住所——ナザレ」

エルサレムを北に去る百マイルのところに、ガリラヤの丘にとりかこまれた或る平原がある。ザカリヤの時代に、その平原の中にナザレと呼ばれた農村がひっそりとしまりかえていた。この村に或るイスラエルの娘が住んでいたが、これこそ後世、世界で一番名高い婦人になった娘であった。彼女の名前はミリヤムと言った。今日私たちは彼女のことをマリヤと言っているが、これはギリシャ語によってこれまでつたえられた名前の近代訳にすぎない。

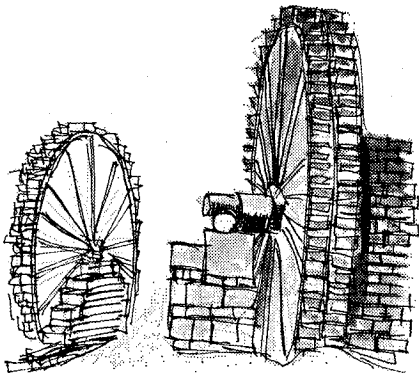
ミリヤムという名前はユダヤ人の中にひじょうによくある名前であった。それはニーフアイ人の予言者たちが予言したように、ユダヤの予言者たちもメシヤの母となる婦人の名前はマリヤ（ミリヤム）と言う、と予言したからであると思われる。

血統によれば、ミリヤムは王家の娘として生れたのであった。彼女はダビデ王の直系であつて、おなじダビデ王の血統に属する或る若者と婚約をしていた。この若者の名前はヨセフと言った。しかしその当時この王家のあとつぎである二人がナザレの村に人しれず住んでいたことは、世の人にとつてとるにたらないささいなことであつた。むじひな世界征服者たちの奪取と貧困によつて、ダビデの王家をつぐ当然の権利をもったあとつぎたちは、人に知られず名も知らないままうずもれていたのであつた。

「クリスマスを告げる使いが再びあらわれる」

ザカリヤにあらわれた御使ガブリエルが、ナザレのマリヤにもあらわれたのはザカリヤにあの示現があつたちょうど六ヶ月後のことであつたと思われる。

この天の示現がマリヤにあらわれたとき彼女はたつたひとりで居た。ザカリヤがひじょうにおどろいたように彼女もまたひじょうにおどろいたのであつた。御使いの光がとつぜんかがやいたのを見て、マリヤはしばらく気も失わんばかりであつたが、彼女が口を利く前に御使いがガブリエルの挨拶が耳に入つた「めぐまれた女よ、おめでとう。主があなたと共におられます。」



このことを聞いてマリヤは思はずあどすきつたが、御使いはときをうつさずはつきりとなくさめのことばをかけて「おそれるな、マリヤよ、あなたは神からめぐみをいだいている」とつづけて言つた。

それから、彼女に確信と理解を解きこむつもりで貴いことばをおごそかにつたえて言つた「見よ、あなたは身ごもつて男の子を産むでしよう。その子をイエスと名づけなさい。彼は大きいなる者となり、いと高き者の子となえられるでしよう。そして、主なる神は彼に父ダビデの王座をお与えになり、彼はとこしえにヤコブの家を支配し、その支配はかぎりなくつづくでしよう」と。

マリヤはその意味がわからなかつたので「どうしてそんなことがあり得まじょうか」とたずねた。すると「聖霊があなたにのぞみ、いと高き者の力があなたをおおうでしよう。それゆえに、生れ出る子は聖なるものであり、神の子となえられるでしよう」ということえがあつた。

マリヤは感激にふるえて、深い宗教心と美しい性格をうつし出していることばでこれにこたえました「わたしは主のはためです。おことばどおりこの身になりますように」。

「ガブリエルは誰であるか」

自らガブリエルであると名のつた御使いは、ほんとうに誰であつたか、マリヤ

かザカリヤのどちらかがこれを知っていたかどうかはわからないことである。それにもかかわらず、この先ぶれをする天の御使いは美しいおとめマリヤの前に立って感激にふるえたにちがいない。彼はマリヤが貴い家筋の娘であることを知っていた。彼はマリヤの生れる何百年も前に数々の予言者が、彼女こそメシヤの母となる者であることを明らかにしていることを知っていた。ガブリエルはまた、彼女マリヤが、彼自身のすえであることも知っていた。

自らガブリエルであると名のついていたこの天からの使者はほかならぬ予言者ノアであった。マリヤがこの御使いのひかりかがやく御顔をあおぎ見ていたとき、彼女は自身の族長である先祖のまだ復活しないさきの霊のすがたを見ていたのであった。

ガブリエルは自分のつげるべきことばをつげおわると、再びマリヤに、彼女の年とつたいとこにあたるエリザベツも身ごもつてはや六ヶ月になるということをうちあけて去った。

マリヤはひとりになると、御使いに上げられたことばをたいせつに胸にしまつて誰にもうちあけなかった。彼女の両親にも、彼女が深く愛していたヨセフにさえもこのことを知らせなかった。それにもかかわらず、彼女が自分の胸のひみつをうちあけた方がよいと思つた一人のひとがあつた。それはほかでもないエリザ

ベツであつた。そこで、彼女はまっすぐ

に急いでエリザベツのところへ行った。マリヤが家を出る数日前に、おそらくたつた二・三日前に神の栄光がマリヤをめぐり照らし、マリヤのために新しい生命の奇蹟が始まつた。

「イエスの母バプテスマのヨハネの母を訪ねる」

ザカリヤとエリザベツとは、エルサレムからほど遠くないところにあるユダヤの山里に住んでいた。そこへ行くまで、百マイル以上もある足もとのあぶない道を旅行するのはたいへんなことであつた。マリヤがエリザベツの家へつたとき、エリザベツは喜んで迎えた。年とつたといふは若いマリヤを心から歓迎し、

主のみたまにみたまされて「あなたは女の中で祝福されたかた、あなたの胎の実も祝福されています」と声高く叫んで言った。そして、けんそんなところで「主の母上が私のところにきて下さるとは、なんとこの光栄でしょう」とつけくわえて言つた。

マリヤは、エリザベツがすでにマリヤの大きなひみつを知っていることを悟つて手みじかに「わたしのたましいは主をあがめます」とこたえた。

それからひきつづき三ヶ月のあいだマリヤはエリザベツの家に居て、エリザベツが産まれているときを待った。いよいよ子供が産まれてみると、前に御使いガブリエルが予言したとおりそれは男の子であつた。両親のザカリヤとエリザベツにとつてこれはすばらしい祝福であつた。親戚も隣人も友人も一同こぞ喜びは加わり、この年とつてからの思いがけなく生れたおきな児になんと命名するかを見るために集まつてきた。

「バプテスマのヨハネ命令されて神権を受ける」

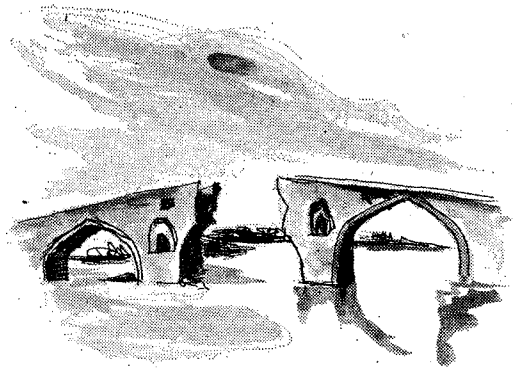
しかしながら、実際に命名式がはじまつてもまだ式を執り行なう祭司は幼児の名をきめていなかった。そこで家内中の者がさかんな議論をはじめた。エリザベツは幼児の名はヨハネにしなくてはいいけないと言つた。これにはらをたてた親戚の男たちは、祭司にむかつて幼児には父の名にちなんで名前をつけよと言つた。

とうとう、エリザベツが反対をとえつつづけているとき、人々はザカリヤのところへどうしようかと言つてきた。ところがザカリヤは口が利けないばかりか、耳もきこえなくなつていたので、入々はこのことを身ぶり手ぶりで彼にわからせた。このときザカリヤは書き板をもつてきてくれという意味を伝えたので、人々が書き板をもつてくると、ザカリヤはそれに「ヨハネ」と書いたので親戚の者はみな不思議に思つた。親戚の者たちはこの信心深いレビ人ザカリヤが、かならずこのただひとりの幼児に父である自分の名を名のらせたいと思つているにちがいないと考へていたからである。

しかし、それにつづいてすぐに或ることが起つたので人々はおどろいてしまつた。それはザカリヤがとつぜん物を言いはじめたからである。それまで一年ちかくも物が言えなかったのが、このときはじめて口をきくことができるようになった。ザカリヤは声高く叫んで言つた「イスラエルの主なる神はほむべきかな」。

それから自分の幼児をほこらしげに見つめながら予言のみたまに満ちて「おきなごよ。なんじはいと高き者の予言者と呼ばれるにちがいない。なんじは主の前にさき立つて行きその道をそなえるからである」と宣言した。

それがあつてからその日のうちに、おそらく人目のつかぬうちに御使いがきてこの幼児ヨハネを神権者に授けしめた



と思われる。歴史がはじまってからこのかた、このような手づきとられたことはなかったが、この幼児はともかく選ばれた者であって生まれたときから聖霊にみたまされていた。このヨハネにつき後になって救い主もしたしく「女の産んだ者の中でバプテスマのヨハネより偉大な予言者はない」と仰せになった。

「マリヤ、ナザレにかえる」

さて、マリヤは故郷のナザレにかえったが、そこにはヨセフがしきりに彼女の帰りを待っていた。

マリヤが身重になっていることにヨセフが気づいたのがいつであったか、それは解っていないが、ヨセフはそれに気がついたときひじょうに悲しんだ。ユダヤ

の律法によると婚約者はすでに結婚をしている者と同じ嚴重なおきてにしばらくおいており、不貞の罪を犯した者は死罪に処せられた。それをまぬがれさせるには、公式の離縁状を出してマリヤを離縁するほかはなかった。ヨセフはけっしてマリヤにつらく当るころはなく、ただあれと思っただけであったから「ひそかに離縁」をしようとしたところに着めた。

このようなはげしい感情にくるしんでいるとき、マリヤは一言も弁解をしなかった。実際に、マリヤはこのことについて主なる神がどうしようとしておいでになるか知らなかったとおもわれる。マリヤの知っていたのは、自分の神聖な使命がヨセフとの婚約を失わせるかも知れないということだけであった。

ヨセフが将来に期待していた結婚の計画がとつぜんむざんにうちやぶられたことを、熱に浮かされたように何ごとともかえりみずに考えこんでいた暗い夜、主の御使いが霊夢のうちにあらわれて「ダビデの子ヨセフよ、心配しないでマリヤを妻として迎えるがよい。その胎内にやどっているものは聖霊によるのである。彼女は男の子を産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼はおのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」と告げた。

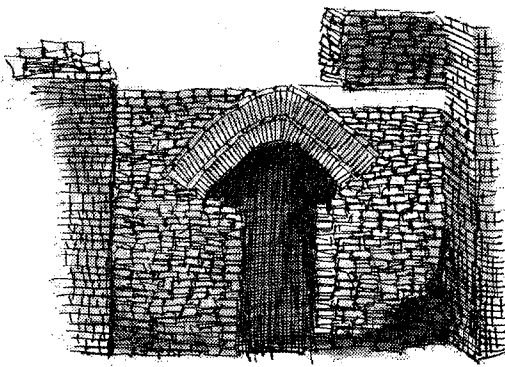
この啓示によってヨセフが、マリヤの神聖な召しについてうれしい同情にみちた理解ができたとき、彼のころは悲

しみからうってかわって喜びにみたされた。誰が彼のころを充分にあらわしてみせることができるだろうか。またヨセフがマリヤに、彼女の胸にひめた真相をよく了解したことを告げたとき、誰がその場のうるわしい情景を筆にしるすことができるだろうか。

それからヨセフはマリヤとすぐに結婚をしたにちがいない。それは天の使いがそうせよと告げたからである。皇帝の命による人口調査が行われるときには、すでに妻と呼ばれることになっていた。

「イエスはいつお生れになったか」

ヨセフとマリヤがベツレヘムへきたのはローマ暦七百五十三年の四月の初期であった。



これらのことがいつ起ったか、その正確な日附は千八百三十年に主が啓示によって「われわれの救い主なるイエス・キリストが、肉身を以てこの世に來りたまいてより千八百三十年にして第四の月すなわち四月の六日」(教義と聖約二十〇一参照)とはつきり仰せになってはじめてわかった。これより前には誰もくわしい日附を知っていなかった。その道の大家によると、第四世紀になつてはじめて十二月の二十五日にクリスマスが祝われた。十二月二十五日にクリスマスが選ばれたのは、当時その日がローマ人の神であるソールの誕生を祝う国民的祭日であったによる。それからクリスマスは十二月二十五日ときまつてしまつたのは単に便宜のためだけである。救い主の誕生なさつたほんとうの日附が啓示によって断言されたのはまことにふさわしいことであつた。

ベツレヘムはもと「ダビデの町」であつたので、マリヤとヨセフにとつては先祖の地であつた。ユダヤの地以外では、ローマ政府は人民に対し、その住居するところで税のための登録をするように命じていたが、パレスチナではこれと異なり、ユダヤ人たちはその先祖からの慣習にしたがい、登録をするために先祖の住んでいた地方へ帰ってくることをゆるぎされていた。こういうわけでマリヤとヨセフはベツレヘムへきたのであつた。二人とも金もちであつたわけではなく、

またマリヤが身重になっていたので二人はベツレヘムへ早く行くことはできなかった。ヨセフとマリヤがベツレヘムのちかくへきてみると、すぐ近くからきている群衆によって市中はいっぱいになりはじめていた。ベツレヘムはエルサレムからたった六マイルしかはなれていなかった。宿に入れない群衆はベツレヘムへあふれて行って、小さなベツレヘムはおさらごった返すことになった。実際このときはまた「すぎこしの祭り」の季節とかさなっていた。「すぎこしの祭り」だけでも、エルサレムやその近くのベツレヘムのようなところへ、いつもたいへんな群衆が集まってくるのであった。

「最初のクリスマスの夜」

ヨセフとマリヤの長い旅もおわりにちかづいたころ、二人は丘の上で草をたべている羊の群のかたわらを通りすぎた。二人の先祖のダビデが若いころ羊の群を守っていたのはこの地であった。二人の母方の先祖のルツが穀物畑で落穂をひろっていたのはこの地であった。

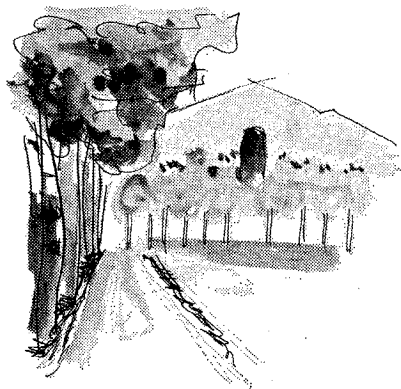
ヨセフとマリヤの二人にとりここはふるさとであって、一步一步をふむごとにそこには神聖な歴史がみちみちていた。

しかし、ダビデの町は二人をころよく迎えなかった。二人がベツレヘムの村中にいっばいになっている群衆の間をおしわけて通ってゆくとき、ヨセフの心配はいよいよ増したにちがいない。今夜は

どこにとまろうか。どこへ行っても人々は「おあいにく」と言っているわられていた。

時間がたつにつれて事態は絶望的になってきた。マリヤの大きな使命を知っているヨセフにとって、誰も三人をとめてはくれないということは不可能におもえたにちがいない。誰か助けてくれそうなものだ。すでに陣痛を感じているマリヤにとつては、ほんとうにどこか居ここのよい便利な場所がなくてはならない。しかし、どこへ行っても「おあいにく」の一言でことわられたのであった。

心配とあせりのあまり、とうとうヨセフは、ふつうのときならこんな所と言っている見向きもしなかった場所をその夜の宿



とするほかはなかった。そこは牛や馬を入れておく所であった。ヨセフのころは、動物を入れておく場所へ心配にのいている新妻をつれて行くとき、さぞかし心の底から痛んだにちがいない。ヨセフはいそいで、ほんとうに名ばかりの居ここのよいところをしつらえた。ヨセフが近くの宿からおよぶかぎりのものを得てマリヤの助けにすることはできたであろうが、それとてたかだかひどく不十分なものであったであろう。王と名のつく人でこのように粗末なところで生まれた人は、救い主をのぞいてその例がない。

この年、すなわちローマ暦の七百五十三年に、ユダヤの国民はこれが彼らの救いの年、すなわち彼らが待ちに待ったメシヤのお生まれになる年であると夢にも思ったことであろうか。天上高く日の栄の宮廷においては、エホバの王がいまやこの世に生まれて肉身をとりたもうを御使いの群が今か今かと待ち受けていた。これが歴史を二分する瞬間であった。たしかに、アダムからマラキに至るまでの昔の聖徒たちは、今や世界の歴史をかえる一大事件がはじまろうとするのを熱心に待ち受けていたにちがいない。

そこからたった一マイルはなれたところ、ベツレヘムの郊外にちかいところの空を舞いながら、あの御供たちは自分らの居ることを知らせるのを待ちかまえていた。その夜野に居て羊の群の番をして

いた羊飼いたちが、この壮大な示現を受ける者として選ばれた。それはマリヤが貴い幼児を産みおとした瞬間にはじまった。このときすぐに羊飼いたちは霊の眼が明らかになって、御使いが彼らの前にあらわれ主の栄光が彼らをめぐり照すのを見た。

羊飼いたちはこれによって焼きつくされるかと思ひ、おそれおのいてしりごみをしたが、その御使いは言った。

「おそれるな、見よ、すべての民に与えられる大きな喜びをあなたがたに伝える。きょうダビデの町にあなたがたのたぬに救い主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。あなたがたは、幼児が布にくるまってかいばおけの中にねかしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである」と。

このようなときに、天の軍勢はもはやあらわれずには居れなかった。昔の聖徒たちの壮麗な合唱はいっせいにひびきわたった。羊飼いたちはその聖徒たちが唱うのを聞いた。

「いと高きところには栄光、神にあれば平和、人にはめぐみあれ」。

この示現がやむと、羊飼いたちはすぐに去ってベツレヘムへ行き「かいばおけの中にねせてある」幼児のいるところをさがした。たぶん、この羊飼いたちは、けもののおぶらを燃やす燈明の光がちらちらと暗の中にみえるのをたよりにけもの

を入れる小屋の入口へたどりついたことであろう。そして、羊飼いたちがまるく集ったとき、彼らはほんとうに「布にくるまれてかきおけの中にねかしてある」幼児をみつけた。

しかし、うまれたばかりの赤ん坊がいばおけの中にねかせてあるほかに、この羊飼いたちのところに強い印象を与えるかわったことは何もなくあった。羊飼いたちが見たのは身分のいいやしいガリラヤの農夫とその妻と今生れた赤ん坊と、それだけのことであった。これらの者のまわりには何の後光もさしていなかった。それにもかかわらず、彼らのところの中にはさきに見た主の栄光があざやかに燃きついているので、今安らかに眠っている幼児をけいけんな畏れをもって仰ぎ見たのであった。今やエホバの大神は肉身に宿りたもうたのだ！

「人の知らない賢者」

羊飼いたちはついにそこを去って、彼らの友だちや隣人をよび起すために急速に走って行った。彼らのことばに耳をかたむける人には誰にも、彼らは前夜見たふしぎな示現と、この新しく生れた幼児について言われたことを話してきかせた。しかし、この話をきいた人々は何にもこころにとめなかった。聖書にはこれらの人はただ「ふしぎに思った」と書いてある。それにもかかわらず、このようなことで羊飼いたちの熱いおもいはすこしも冷えなかった。彼らは「見きざした

ことが何もかも自分たちに語られたとおりであったので、神をあがめ、またさんびしながら」各々の羊の群へかえって行った。

このようにして、最初のクリスマススの早朝はそれ以上何も起らずに過ぎて行った。幼児がねむっている間に、マリヤはこのときのすばらしい歓喜をすっかり自分の胸にきざみつけておいた。

このときあの博士たちはどこに居たか。クリスマススの話にはいつも博士たちが出てくるが、救い主が誕生なさった夜に博士たちはその場にきていなかった。実際、この博士たちの故国は「東の方へ」はるか行つたところにあつたので、この最初のクリスマススの朝にはアメリカ大陸のニューフェイス人と同様、故国で天に大きな新星がとつぜんあらわれたのを見て喜んでいた。昔、予言者たちは人々に

この星があらわれるのは救い主がお生れになったしるしであると知れと言っておいた。それであるから、この星を見た博士たちはすぐに支度をしてパレスチナの地へむけて旅立った。博士たちはこのすばらしい幼児に会ってひれふしておがみ、自分たちのおくりものをささげたいと思つた。しかしそれは長途の旅行であつた。すぐにわかるように、聖書を見ると博士たちが数週もしくは数ヶ月におよぶ長旅のあけくべツレムへ着いたことが明瞭である。

やがて、マリヤとヨセフは新しく生れた

た幼児のためにさだめてある律法や儀式をわけなく行う用意をした。幼児が生れて八日め、人々はこの幼児に命名をするため祭司のところへつれて行った。そのとき人々がこの幼児につけた名前は「ヨシュア」であつた。これはユダヤ人の中にいくらでもある名前であるが、御使いの指図に従つてこのように命名をしたのであつた。後になって人々は彼のことを「ナザレのヨシュア」と呼んだが、これはほかの「ヨシュア」とはつきりくべつをするためであつた。今日私たちは「ヨシュア」のかわりに「イエス」と言っているが、これは「ヨシュア」に相当するギリシャ語の変形にすぎない。この名前は救い主の使命をよくあらわしている、これは「エホバはわが救い」という意味をもっているからである。

「イエス神殿でささげられる」

この命名式があつてから、マリヤはさだめられた「きよめ」の期間がすぎるまで三十二日の間しずかに待った。それがすぎると、ヨセフとマリヤは神殿でイエスをささげるために六マイルの旅をしてエルサレムにのぼつた。この男の初子を神にささげるのはモーセの律法によるさだめであつた。

またこの場合、律法に従つて子山羊と一羽のはとをぎせいとしてささげなくてはならなかったが、貧しい者は二羽のはとをささげてもよかつた。マリヤのささげものが二羽のはとであつたことは、そ

こに意味がある。

このときエルサレムに住んでいたシメオンという賢い信仰深い人があつた。

この人は主なる神に対して忠実であつたから、主のつかわしたもう偉大なメシヤに会うまでは死なないという啓示を受けていた。

この日、シメオンがエルサレムの都で仕事をしていたとき、とつぜん彼は聖霊を感じいそいで神殿に入った。ちょうどそのとき、ささげものをする儀式がはじまるころであつたが、シメオンは聖霊にうながされていそぎ進み出で、その幼児をやさしく母親の手から自分の両手に抱きとると、天を仰ぎ見て深い感動をおぼえながら言つた。

「主よ、今こそ、あなたのみことばのとおり、このしもべを安らかにさせて下さい。わたしの目があなたの救いを見たのですから。この救いはあなたが万民の前におそなえになったもので、異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの栄光であります」。

それからシメオンはマリヤの方に顔をむけ、予言のみたまにみだされて、この幼児に託された大きな使命のことを語り、また母親として「つるぎで胸をさしつらぬかれる」ような苦しみを受けなくてはならないと言つた。三十三年後に、カルバリの山の上で十字架の下に立つたとき、マリヤはシメオンの言つたかなしい予言のことばをしみじみとかみしめて

いた。

またこのとき神殿の中に、予言のみたまにめぐまれているひじょうに信仰の深い有名な女の人が居た。この女の人はそのとき八十四才になっていた、夜も昼も神殿に居て主に仕えていた。この女の人はその名をアンナと言ったが、シメオンとおなじく聖霊によって、イエスが待ちに待ったメシヤであるとあかしをした。そして、居あわせたすべての人々にあかしをし、今まで生きて救い主をこの目でみることができたと神に感謝をした。

儀式をすませてヨセフとマリヤはイエスをつれて故郷のベツレヘムにかえった。それまでに彼らは「家」を得てしまっていたことを福音記者のマタイはとくにしるしている。

「博士の来訪」

博士たちが、新しく生れたユダヤ人の王を探してエルサレムへ来たのはそれからしばらくあとのことであった。当時のパレスチナ地方の事情についてはまったく無心であった博士たちは、王のところへ行ったら新しく生れた王はこれだと言つて教えてもらえろと思ひ、無邪気な心持ちでヘロデのところへ行つた。しかしヘロデは博士たちのことを聞いて内心ひじょうに不安を感じた。ヘロデは内心この博士たちはユダヤの王となる幼児が生れたとかなく信じているが、この話を聞いたら今一般民衆の間に急速にひろがっている或る物語はほんとうのことだと

受けとられるにちがいない。しかもその物語のもととは言へば、キリストとなる幼児がすでに生まれたとおごそかにあかしをしている或る予言者たちの口から出たことなのだ、これはすてておけないと思つた。

ヘロデはいそいで祭司長たちと律法学者たちを全部あつめて、言いつたえと予言によるとキリストはどこに生れるのかと彼らに問ひだした。彼らは言つた「それはダビデの町ベツレヘムです」と。これを聞いて、ヘロデは気の狂つたようにある策略をめぐらした。自分の妻子を殺してまでも王位を守つたのに今だまつて見ている法があるか。迷信深い民衆が待ちに待ったメシヤすなわち神聖な王であると主張して立ちあがるかも知れない。極悪の王位請求者にだまつて王位をうばいとられる法があるか。このように死にもの狂ひの憎悪の精神を抱いて、ヘロデは一人のこらず幼児を殺してしまおうと計画した。

そこでヘロデは「ひそかに」博士たちを呼んで、かれらが故国ではじめて大きな新星のあらわれたのを見たときについてくわしく聞き出した。そして彼らをベツレヘムにつかわし、行つてその幼児を見つけたらわたしに知らせてくれ、わたしもその新しい王をおがみに行くからと言つた。博士たちは王のことは聞き入られて出かけた。

博士たちは夜道をベツレヘムにむかつ

ていそいで行つた。その退中、博士たちはかつて故国の空にあらわれて救い主の誕生をつげたあの星がまた大空にキラキラとかがやいているのを見てひじょうに喜んだ。博士たちは聖なる幼児の居るところへ導びかれたと思われ、しかしそこは動物を入れる小屋ではなくなつていた。ヨセフもマリヤもずっと以前からもつとよい「家」に住んでいた。マタイ伝によると博士たちは「家に入って母マリヤのそばにいる幼な子に会ひ」ひれ伏しておがみ、また宝の箱をあけて黄金、乳香、没薬などのおくりものをささげた、としてある。

それから、博士たちが立ち去るときがきたとき、靈夢の中に主の御使いがあらわれ、ヘロデのところへ帰らずに別の道を通して「東方へ」帰れと命じた。博士たちはこの命に従つた。彼らは人の知らないところからきて人の知らないところへかえつて行つた。これ以上何も知られていない。何人きたか、どこの国の人かそれもわかつていない。博士たちについてこのほかに言われていることはみな架空の物語にすぎない。彼らが歴史の上にのこしたあとは十二節にたらない聖句である。

「幼児の殺りやく」

ヘロデは東方の博士たちのかえりをじりじりとした気持ちで待っていたが、かえるのぞみがまったく絶えたことを知ると烈火のごとく怒り、ベツレヘムをてつて

的に搜索して二才以下の男の子を探し出し、一人のこらず殺してしまふと傭兵たちに命じた。ヘロデが博士たちにむかい、救い主の誕生をしらせる星がはじめであらわれたときを根ほり葉ほりたずねたことから、二才以下の男の子をみな殺せと命じたことは明らかである。

兵士たちはすぐさまヘロデの命令に従ひ、無力の民に空前のおそろべき犯罪を行つた。しかし、イエスはその場に居なかつた。あの博士たちが東方へむかつて去るや否や、一人の御使いがあらわれ、マリヤと幼児をつれてエジプトへ行くとヨセフに命じた。三人は命に従つてエジプトへ逃れ、ヘロデの憎悪がベツレヘムの母親から二才以下の男の子をうばつてことごとくこれを殺すまで、そこで安全に待つていた。

しかし、ヘロデがこのおそろしい「幼児の殺りやく」を冷酷にも命じたとおりに、また冷酷な報復の手はヘロデの生命の上にのびてきた。

ヘロデが、王座を保つためにはその霊を売りわたしてもよいと考えたそのとき、彼は最もいまわしい病気で自分が死にかけていることを知つた。

ヘロデは死ぬ前の数日間、最も大きな苦しみになやんだ。死ぬ五日前には自分の命を絶とうとさへした。死が近くにせまっているとき、ヘロデは最も親近の廷臣たちでさえ彼にそむいていることを知つた。彼の目の前で王国はむざむざに崩れ

はじめていた。百年たためうちに、この悪名の高い人物の子孫は地球の上から一人のこらず抹消されてしまうことである。

熱と苦痛にさいなまれたヘロデにとつて、とうとうやってきた死はむしろ喜んで迎えられる。ユダヤの民にとってヘロデの死はめぐみであった。国民はお祭りさわぎをしてヘロデの死を祝った。

熱帯の河ナイルの下流に沿った地方でヨセフとマリヤは幼ないイエスと共に時節を待っていた。そのとき、一般人民に知らせが行きわたるさきに、ヨセフは御使いからヘロデの死を知らされた。三人はすぐさま故国へかえる旅支度をした。

あきらかに、ヨセフとマリヤはベツレヘムに永住したと思っていたけれども、三人がベツレヘムの地方に近づいたときに、ヘロデの残忍な息子アケラオがかわってユダヤを治めていることを聞いた。彼らは長旅に疲れてはいたがそのまま旅をつづけてガリラヤの丘をこえ、ついにナザレに到着した。そして彼らはここにおちつくことにきめた。

すべてこれらの場合を見ると、三つの大きな予言が文字通りに成就していることがわかる、すなわちイエスはベツレヘムで生れ、エジプトから出て来て、ナザレ人と呼ばれるという三つの予言である。

この一つ一つの予言は互いにむじゅんしているように見えるけれども、神の知

恵によって、三つとも完全に事実となつてあらわれた。救い主の一生を見ると、救い主について言った予言者の約束は一つたりとも果されていないものはない。

年がたつにつれて「イエスはますます知恵が加わり、背たけものび、そして神と人から愛された」と聖書にのしるしてある。イエスは導きと教えを授ける天使から教えを受けた。三十三才になって、イエスはついにこの世に生れてきた使命を完成する備えをした。最後の瞬間でも自分が望むならあともどりをするこができたのにイエスはあともどりをしなかった。イエスは、人類と地球およびその上にあつたあらゆる生命を救うために、身を落してあらゆることを経験した。救い主の使命が目ざすところは、多くの人々が考えているよりはずっと広いものであつた。

「ほんとうのクリスマスの精神」

さて、以上結論したのはクリスマスについて知られている歴史である。このほかのものはすべて人間が自分で新しくつくりだしたものであつて、たとえば美しいあかりをつけた木は異教のローマ時代から、花輪とヤドリ木は昔の神秘なドルイツの僧侶から、みんなの胸をおどらせる聖ニコラスの訪問は第四世紀のキリスト教徒の伝説から起つたものである。そして楽しいサンタクロースはまったく近代空想の産物にほかならない。

しかし、それにもかかわらず最もたい

せつなもの、すなわち「地には平和、人に対してはめぐみ」という精神は今なおのこっている。

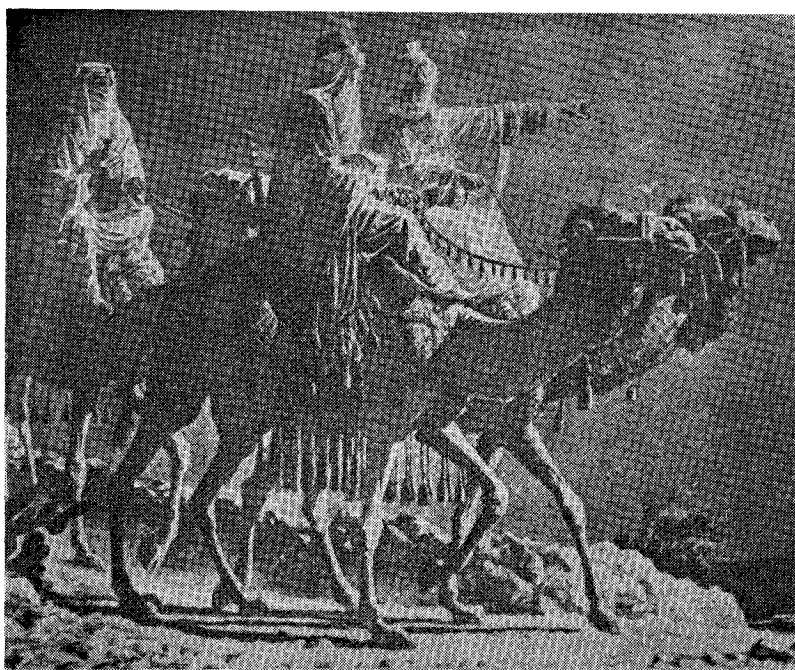
クリスマスのときほど、平和が現実には世界一般の人々の身近かにせまってくるときはほかにない。一年中でこのときほど、人がいつもよりもっと多くの友人を思い出し、もっと多くの敵をゆるすときはない。しかしそれも、将来くることの前ぶれにすぎない。

現在私たちの身近かに、天の軍勢にとりまかれて、今まで私の説いたイエスは再びこの地球に帰ってくるためのために今日働いておいでになる。その日はすばらしい日であるにちがいない、おそらく私たちが予期しているよりずっと早くくるであろうが、その日がきたとき私たちはそれを「福千年」とのときと呼ぶ。「福千年」こそ千年の間この地球上につづく「クリスマスの期間」である。



もう一人の博士

山田五郎



毎年クリスマスの時期がやって来ると私たちは東の国からユダヤの国ベツレヘムへ行き新しく生まれた王を拝し宝物をそなえた物語を聞きあらたな喜びを感じますが、このたびはヘンリー・ヴァンダイクという人が書いた、もう一人の博士（この博士は新しくでた星にしたがってベツレヘムへ行ったが、一生涯をかけても求める王に逢えなかった）についての話です。

この、もう一人の博士、はその名をアルタバンといい、たいして出世もしなければその名も知られぬ一介の武士にすぎませんでした。が賢者の一人でありペルシャに住んでいて、大きな富を持ち博學で大そう信仰の強い人でした。アルタバンは彼の学者仲間と聖典を学び、何時救い主がお生れになるか研究してわかったことは、新しい星が現われるということでした。そこで彼はペルシャで空を見守り他の仲間はバビロンで空の星を見守ることにしました。

新しい星のしるしが現われる夜、アルタバンは自分の家で九人の賢者と話し合っていました。アルタバンはそこにいた友だちに「私の仲間は三人バビロンのボルシッパで空を見守っていて、私はここで現われているんです。もし新しい星のしるしが現われたら三人は十日間私を待って下って、そこで私たちは皆んなエルサレムへ行くのです。今夜その星のしるしが現われると思います。だから、も

う持物を全部売ってこの宝石、サファイヤとルビーと真珠を売ってこれらの品を私の捧げ物として王に差し上げるのです。」と、いきました。そして「新しい王を拝すことが出来るように皆さんと一緒にこの巡礼の旅に行きませんか？」と話し乍らアルタバンは胴巻の奥深くに手を入れて宝石を三つ取りだしました。一つは夜空に輝く星の一つを手にしたようであり、もう一つは朝日の輝きよりも赤く光り、あとの一つは雪におおわれた岸が夕暗に清く光るようでした。アルタバンはこの宝石を生まれる王に捧げようというのです。そこで彼の友だちの一人は「アルタバン、貴方は空しい夢を見ているのではないか、亡びたイスラエル家から王など生まれるはずないよ、そんなことを求めることは影を追い求めるようなものだよ。」と、いつからアルタバンに別れを告げて家を出ました。

あとに残った者たちもそれぞれの言い訳をして皆帰り最後に最も年長者で最も信頼する人だけが残されました。そして「私は巡礼に出るには年をとりすぎているから行かれなくて残念だが、心は貴方と共に旅をします」と、言ってアルタバンの肩をたたき「すばらしいことを経験する多くの人は、一人で旅しなければならぬものだよ。」と。

一人だけになったアルタバンは手にしていた宝石をもとの胴巻の奥深く入れてカーテンを開きテラスへでてまた寝ずの

番で夜の空を見守りました。

木星と土星がちらちらとあわい光を発してあたかも二つの光がとけ合って一つになるかのように見えたその時、青い火花のような光がその下の方に現われ紫の光から丸くしだいに赤みかかったものになりました。

アルタバンは「しるしが見えた、王はお生れになるから拜しに行こう」といいました。

夜中、アルタバンの持馬で一番足の速い馬は皆にサドルをつけて今やおそしとアルタバンの氣持がわかるかのように前足で土をたたいて待っていました。

アルタバンは馬にまたがりながら「神よ我らを祝し旅路を守りたまえ」といいました。アルタバンのはげましを受けて忠実な馬は毎日予定の距離を進んで行き十日目の夜がやって来ようとした時はバビロンの郊外にさしかかっていました。沙漠の中に茂る一郡のヤシの木々が海の中の島のようになっている所を過ぎようとした時、馬は歩調を乱し前へ進もうとしなくなり足をふん張り立ち止まっています。

しかたなくアルタバンは馬を降りてみると、かすかな星の光で何やら人の形をしたものが道に横たわっていました。近づいて見ると顔と着ているそまつな衣から、ユダヤのとらわれ人でまだバビロンに住む者であることがわかりました。皮ふを見てこの人はバビロンの湿地にこの

期節に発生する独特な熱病に犯されて、やせほせた手は死の冷たさをさえ感じさせました。アルタバンをその場を立ち去ろうとするとため息がもれて彼の衣の裾に骨だけのような手がかすかにのびてきました。

アルタバンはこの見知らぬ死にかかっている人を介抱する時間がないのを悲しみました。しかしこの瞬間が彼の生涯を決める瞬間となったのです。アルタバンは永年の研究の結果を人間一人に対する一つのあわれみのために水の泡にすることは出来ないことです。でもどうして死にかかっている人を見捨てる事が出来るのでしょうか？

そこで彼は「あわれみ深い神よ、神だけが知ったもう聖い道の知識を与えたまえ」と祈ると、急ぐ旅をそのまま続けてはいけないうわかりました。賢者は天文学者であると同時に医者でもあるので彼は外套をぬいで治療を始めました。数時間たつと病人は意識をとりもどしたので、持っていた食糧のすべて、パンやブドウ酒もそして薬草と注意をあたえていました。

アルタバンは急ぎに急いで行きました。が、彼が着いた時はすでに夜も明けてしまい落達う所に仲間の姿はどこにも見当りませんでした。そして人目を引くように書かれた文字が見えたので読むところ書いてありました。私たち三人は十日目の夜中過まで待ちましたが、これ以上

待てません。後を続いて沙漠を越えて来なさいこと。

アルタバンはさすがに落胆の色を顔に浮べ両手で頭をかかえ込み「どうして沙漠を越えることができようか？ 食糧もなくその上一頭の疲れた馬しかない。バビロンの町でサファイヤを売ってラクダの一隊と旅に必要なものを買わなければ、もう決して仲間を追つことは出来ないかも知れないが、あわれみをかけて遅れてしまふ目的を達することができないかも知れない、でもそれは愛の神のみが知っている。」といいました。

数日後、アルタバンの一隊がベツレヘムに着いた時、町は荒れはてて、ヘロデの軍勢が来て新しい税をかけるとうわさが広がり、男は皆それぞれヘロデの手の届かぬ所へ羊の群れを連れて行きました。

一行、戸が開いたのでアルタバンは戸口に立つと母親が子守り歌を歌っているが聞えてきました。家の中に入って自己紹介すると、女の人は、三人の博士がベツレヘムへ来てからもう三日過ぎて、ヨセフとマリヤと生まれた子供を見て贈り物をささげて行き、来たと同じようにどこえともなく不思議に去って行ったことを聞かれました。

ヨセフは妻マリヤと子供を連れてどこか遠い所へ行き、それはエジプトだときさやかれていました。

アルタバンはその話を聞き乍ら赤ん坊

を見てみると、ニコニコ笑いながらわらわらした彼の顔に手をやってほほをさわりました。やわらかい手に触れてアルタバンの心は暖かいものを感じたその時、外で何やら大声で叫び急に騒わがしくなりました。女は金切声を上げ必死に叫び「ヘロデの軍勢が子供を殺しに来た!!」

アルタバンが戸口へ来てみると一隊の兵隊が血にまみれた手をふりかざして道を走って行きました。

隊長がこの戸口に来てアルタバンを押しつけようとしたが彼はあたかもまた空の星を見守るかのように静かに動くともせず、手を胴巻に入れて大きなルビーを出して「私はこの家を素通りして行く賢い隊長さんに、これを差し上げよう」と待っていたのです。これを出した寶石の輝きに隊長は目を見はり「この家に子供はいないノ次へ行けノ」と言って寶石を手にして部下に命じました。

そこでアルタバンは「神よ私の罪を赦したまえ、神にささげるべき物を人のために使ってしまった。王のみ顔を拝むにふさしくなることができるでしょうか？」と祈りました。背後には喜びにむせる母親のむせび声がして、「私の小さい者を救って下さったので、主が常にあなたを祝しまし、神の顔があなたに光りいつもあわれみをかけられますように神がみ顔をあなたに向けて平和をあたえて下さるよう」と。

アルタバンは、まだまだ、王を求め彼

より先にベツレヘムからエジプトへきた小さい家族を探し求め、それから後幾年も彼はエジプトで姿を見せ、ピラミッドで、アレキサンドリヤの貧しい所で、ヘブルのラビから富める者ではなく貧しい中から探せと言われていたので、また場所から場所へと彼の姿は見られました。

アルタバンは飢饉で食べる物もなく苦しんでいる国や疫病に犯され、なすすべもなく悲しんでいる人々の住む所や、暗い地下の牢獄につながれている人々を訪れまたは、あわれな奴隷市の場をも訪れました。その間、彼は拝むべき御方を探し出すことはできませんでしたが助けを要する多くの人に永年の間、飢える者に食をあたえ、裸の者に衣を着せ、病める者を医し、またとらわれている者をなぐさめてきました。

ある時、アルタバンはローマの牢獄の前で立ち朝日を浴び乍ら待っている姿を見ました。この時彼は王にさざげようと秘し持っている最後の寶石を胴巻からとり出してその美しいあわいバラ色の花を表面にうかべ、すでに失ったサファイヤとルビーの分まで光っているように思えてました。自分の身の暖かみを持ち永く持ち歩いているので一番大切なもののように思えました。

アルタバンが巡礼に出て最早や三十三年の才月が流れ頭は雪のように白くなっていました。自分の余生はもう短いことを充分知っていました。なお、一生懸

命に希望を持って王を探し求めました。

時に町は過ぎ越の祭で人の波にあふれ遠くから人々はやってきました。そして人の波は不思議にダマスカスの門の方へと流れて行くので、アルタバンは皆んなどこへ行くのかときけば、一人が、「ゴルゴダの丘へ行くのだ、そこで二人の強盗と共に、私たちに多くの良いことをして下れたナザレのイエスと呼ばれる人が十字架につけられる。祭司たちはこの人が神の子とって殺せというのだ、ピラ人は、その人が、ユダヤの王」といったといって十字架につけさせたのだと答えました。

求め疲れたアルタバンの心にこの言葉は何とも言えぬものをあたえました。陸に海に生涯探し求めて来たのに今は暗く不思議にそして絶望の知らせが来ました。この王は否まれ過われそして十字架の上に、あるいはもうすでに死んでしまわれたかも知れない。でもこの御方は三十三年の者に星が現われたあの御方と同じであらうか。

アルタバンの心は高く打ち「神の道は人の思いよりも不思議なものでまだ私は主に逢えるかも知れないそして彼の死も私の宝石で、もしかししたら、敵の手から救えるかも……」と思いました。

アルタバンがカルヴァリの丘へ向おうとするとマセドニアの兵隊が衣も破れ髪を乱した若い女を連れてやって来るのを見ました。アルタバンが立止って見ると

女は兵隊の手をふり切って彼の足もとにふてしがみつきました。「助けて下さい」といって女は「聖い神のもとに助けて下さい。私の父も賢者でしたが死んで負債のために奴隷として売られて行くのです。」と。

アルタバンは心に熱いものをふたたび感じそれはあのバビロンの郊外でまたベツレヘムのある家で感じたものと同じでした。二度とも主のためにさざげようとしたものが人のために使われてしまい、またも最後の一つを失わねばならないのか。でも、はつきりしていることは、この女を悪から助けなければ。

胴巻の真珠を出して、この時程一つの宝石がそれ程光りをはなち、やわらかくしかも生きたように思えた時はありませんでした。

彼は奴隷の女に手渡して、「娘よ、これが、あなたの身のしろ金だよ、これは主にさざげようとしていた最後の宝だ」言葉がまだ終らないうちに空は暗くなり、地はゆれ天はさけて鳴りひびきました。家はゆれ兵隊は恐れ逃げ出しましたが、アルタバンは壁にもたれて身を守りましたが、今の彼にとって何も恐れることがあるでしょうか？ また何を望むことができるでしょうか？ アルタバンは王に贈るさざげ物の最後の一つを人のために与えてしまいました。彼はもう探し求めて贈るものがなくなり巡礼はここで終止付がうたれるのだと思いました。

その時、天もゆれるかのように地は長く震れ大きな重い互が屋根からアルタバンの頭の上に強く落ちました。彼は息もたえだえそこに倒れ、見ていた娘はアルタバンが死んだと思い恐れおののいていました。そこへ小さな声が雲ほのかにさす光を通して聞えてきました。声は、はるかかなたから奏でる音楽のようでしたがその音はつきりとしていました。娘には言葉を理解できませんでしたが、アルタバンの唇が動きだして何かに答えているのを娘は聞きました。「主よ、そうではありません。何時私はあなたが飢えている時に食を与えましたか？ また渴している時に飲み物を与えましたか？ 何時私はあなたを見知らぬ人として御世話しましたか？ 何時私は小さいあなたの生命を助けたか？ あなたが病気の姿を見たり牢獄につながれたのを見ましたか？ 三十三年間もの長きにわたって私は、あなたを求めてきました。あなたが主に伝えるどころか御顔さえ見ることができませんでした」といって彼の言葉はとぎれました。そしてふたたび天から声がして、このたがは娘も良くわかりました、その言葉は「あなたがたによく言うておく、わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」。

静かなうちに不思議と喜びが顔に表われてアルタバンは最後の深い意気を吸いおだやかに動いた唇はとまりました。彼の旅は終り宝物は受け入れられもう一人の博士はついに王を探することができました。

クリスマスに思う

雄 正 部 渡

楽しいクリスマスシーズンを目の前に迎えて、書店には色とりどりの美しいクリスマスカードが飾られ、街行く人の顔も浮き浮きしたとき、また突如として、新聞の第一面、に悲惨全日空の事故、五十名の尊い生命が一瞬にして奪われ、その中には、め度たい人生の門出をした十数組の新婚夫婦も交っておりま。今年は何故でしょうか、この日本の地で二月の北海道から羽田に着陸しようとした全日空、引続きカナダ、英国と外国機の大事故に次いでまたこのクリスマスシーズンに悲惨な写真を見なければならなくなってしまう。瞬時にして肉親を奪われ、呆然として涙も出ない家族の顔は到底見るに忍びず思わず新聞を閉じてしま。この空中の事故だけでも、今年一年間にこの日本の地に数百の内外人の尊い生命が奪われて行ったのですが、驚異的な地上の交通事故の増加、また頻々として発生する炭坑爆発、この平和のときに於ても戦時以上に何万何千と言う生命が奪われて人々は悄然としてと方に暮れております。誠に世は暗然たる闇に覆われ末の日が近ずいたのに、まだまだ主を迎える準備ができていないようでありま。

クリスマスを迎えるに当って最も大切なことは私たち一人一人がその心に主を迎えて、主をまだ迎えていない多くの世の人に主を伴うことではないでしょう

か? 「わたしは世の光である。わたしに従って来る者はやみのうちを歩くことが



なく命の光をもつてであらう」

主は更に私たちに命ぜられました。

「あなたがたは、世の光である………あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたたがたの父をあがめるようにしなさい」

幼な子イエスをその腕に抱いたシメオンは

「主よ。今こそ、あなたはみ言葉のとおり、この僕を安らかに去らせてくださいます。

わたしの目が今あなたの救を見たのですから」と言って安らかに霊界へ去って行ったのです。主は言われました。

「わたしはよみがえりであり命であるわたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる」

主を迎えたとき、突如として襲って来る死も私たちにとっては甘いものとなるのです。予言者ジョセフ・スミスを通じて主は語られました。

「およそ、われにありて死ぬる者は死を味わうことなし、そは死は彼らにとりて甘ければなり。」

私は二月の全日空の事故で寸時にして両親を失い孤児となった姉弟が羽田飛行場で涙にぬれて相抱き「お父さんお母さんはきつと帰ってくるよ」と弟を力づけている、いたいけな写真を見て、じっとしておることができず、東京北支部の柴田兄弟と共に住所を探して訪ねました。

私はこの父母という光を失った孤児に何とかして主の光を与えたかったのです。そしてお父さんお母さんは死んだと思えずきつと帰って来ると信じている孤児たちに、それが真実であることを、彼らが主に従ったときに、今は亡きお父さんもお母さんも、神殿の儀式により霊界で救われて、今は孤児となった姉弟と共に永遠に結ばれて神の御許に行けることを何とかして知らせたかったのです。そのとき彼らは大声を上げて

。死は勝利にのまれてしまった



死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか、死よ、おまえのとげはどこにあるのか。
と叫ぶでしょう。

予言者ジョセフ・スミスは啓示により聖徒たちを勇気づけ激励しており、「兄弟よ、われらまことに偉大なる大義に向って進まざらんや。進み行きて退くことなかれ、奮い起てよ、兄弟たち。進み進みて勝利に至れ。汝ら喜べ大いに喜べよ。世の人、歌声を張り裂けしめよ。死者よ、王インマニエルに水遠讚美の歌を語り出だせ。インマニエルこそ創世の前より、われらをして死者をその囚屋より贖うを得しむることを定めたまえり。そは囚人は釈さるべければなり。山々は喜びの声を

を挙げよ、汝ら谷よ、皆高く叫べ。すべて諸々の海と乾ける地とは、汝らの永遠なる率の爲したもう驚嘆すべき御業を語れ。河よ、小川よ、谷の流よ、歎びの声を挙げて流れ下れ。森よ、野の樹よ、みな主を讃えよ。堅き巖よ喜びに泣け。日よ、月よ、天の星よ、共に唱え。神の子らよみな喜びの声を挙げて叫べ」

パウロは「神は感謝すべきかな、神はいつもわたしたちをキリストの凱旋に伴い行き」と言っておりですが、この凱旋の歡喜こそ私たちすべての人類が常に求めしかもキリストを迎えることによって誰にでも得られる勝利の喜びではないでしょうか。

或とき私は新聞紙上に火災で一度に母と妹を失った少年の涙の詩を読みました。

もう一度でいいからお母さんに逢いたいな
もしあえないなら電話でただその声だけでも聞かせてちょうだい。

私はこの少年にキリストの光を、永遠の生命を、お母さんと結ばれる勝利の喜びを一刻も早く知らせたく、福音を送りました。

十一月六日、待ちに待った横浜支部のオーブハウスの安息日、私は今日六十三年間に及ぶ信仰を守って、八十六才の御不自由な身を横たえて居られる鈴木なみ姉妹に何とかして出席していただき喜び

を共にしてもらいたいものと一週間ばかり前にお伺いしたのですがどうしても部屋から出られることは困難なようで思いとどまざるを得ずほんとに残念でした。

けれども私はその時、なみ姉妹が最近系図協会から送り返されて来たシートを見せさせて下さったものですが、それは私も忘れてしまっていました。二、三年前にお手伝いして戦死した一人息子さんと亡くなられたお嬢さんの為又一昨年暮れに十年近くもなみ姉妹の御看病をされ、突然交通事故で亡くなられた御主人の爲のシートでした。そしてこれらのなみ姉妹の愛する肉親が皆神殿の儀式を受けて会員となっていることをお知らせするとなみ姉妹は涙を流して喜ばれ「もう何も思ひ残すところはありません只々喜びと感謝で神様のお召しを待って居ります」と言われ、亡き御主人と又息子さん娘さんと永遠に結ばれる日をそして共に神の許に帰る日待ち望んで居られるようでした。

私はこの尊い仕事、ブリガム・ヤング大管長が人類始って以来の大事業と言われた、系図探求と神殿の儀式のお手伝いを少しでもして、なみ姉妹をお慰めすることができたことを心から喜び感謝し、この生ける者と死せる者の救いの聖業に向って益々精進したいものと念願した次第であります。このクリスマスまでの日に私たちは主が予言者ジョセフ・ス

ミスを通じて更に私たちに命じておられる次の言葉を深く心に刻み込み主の再臨を待ち望もうではありませんか!!
「見よ、主の大きな日は近すけり。主の来りたもう日に当り得るは誰ぞ主の現われたもうとき、堪え得るは誰ぞ。主は金を吹き分くる者の火の如く布さらしの洗剤の如し。主は銀を吹き分けてこれを精製する者の如く座を占めてレビの子らをきよめ、金銀を精煉する如くにこれを淨め、かくて義しきに適う捧げ物を主に捧げしめたまわん。この故に、いざわれら一教会員として、一人の民として、また末日の聖徒として、義しきに適う捧げ物を主に捧げん。またいざわれら、主の神殿の完成せるとき、その中に於て主が完全に受け入れたもう価値ある、われらの死者の記録を載せたる一冊の書を主に呈せん」

クリスマス特集 その3

演 劇 (一 幕)

ユ ダ に 降 る 星

高 橋 実

(東京北支部)

登場人物

ウノイ……予言者風の老人、
百才以上か?

マダク……男、リーダー格

ナオバ……男、ややあわても

の

サヒロ……男、小心者だが口

が悪い

ヒヨロム……男、頭がいい、

おとなしい

マサベ……男、口数少くおと

なしい

オリカ……女、明るく活発

カナ……女、感傷的、すぐ感

激する

ハサジ……イスラエルの兵士

デブ

キノブ……イスラエルの兵士

やせている

ナレーター

——幕があく前に——

——静かな音楽……(古代イ

スラエル地方を幻想させるよ

うな曲……)

ナレーター「紀元前約千二、三

十年頃のイスラエル、当時、

預言者サムエルは主の御言葉

により、サウルをイスラエルの

王とした。しかし、サウルの

の、主にそむいた行為により

すでに主は、サムエルを通して、

新しくイスラエルの王と

なるべき者を選ばれていたの

である。」

——音楽、続く——

——突序騒しい曲に変わる——

男の声「大変だノ 大変だノ

おーいノ ついに戦が始まっ

たぞーっ。」

と言いながら舞台へ登場

——幕があく——

舞台は大テントの中、一人の

年老いた予言者風の男(百年

は生きていたように思われ

る)を囲んで数人の男、女が

座っている。羊飼や水くみ女

百姓等色とりどりである。

(テントの中は適当に紀元前

千年頃の感じが出ている。)

マダク「どうした、ナオバ。何

かあったのか。」

ナオバ「そうだノみんな聞け、

ペリシテびとが軍を集めてわ

れわれイスラエルの民に対し

て戦おうとしているのだ。」

サヒロ「それでペリシテのやつ

らはどこまで来たのだ。」

ナオバ「ソコとアゼカの間にあ

るエベス・ダムに陣取って

いる。サウル様の卒いるイス

ラエルの軍は、エラの谷に戦

列をしていて相対している。」

皆、恐れてガヤガヤ騒ぐ

老人ウノイ「静かにしなされ、

騒ぐことはない。兄弟たちよ

この戦いはイスラエルの勝ち

じゃ。ある若者が英雄となっ

て、この戦はイスラエルが勝

つのじゃ。」

ナオバ「ウノイよ、なぜそれが

わかる、聞かせてくれ。」

ウノイ「まず、その前に、一つ

の物語を聞かせよう。これは

さばきづかさが世を治めてい

る頃じゃ。このベツレヘムで

な。」

オリカ「ウノイ様、その話を早

く聞かせて下さい。」

ウノイ「よしよし、では語って

聞かせよう。——間——一人の男

とその妻が、二人の男の子を

連れてこのユダのベツレヘム

を去り、モアブの地へ行った

丁度その頃、国に飢きんがあ

ったのじゃ。その男の名はエ

リメレクと言ひ、その妻はナ

オミといった。二人の息子は

マロンとキリオンと言った。

彼らはモアブの地でしばらく

暮したが、ナオミの夫エリメ

レクは死んでしまった。」

カナ「かわいそうに。」

ウノイ「二人の男の子はそれぞ

れモアブの女を妻に迎えに、

その一人の名はオルバといい

もう一人はルツヒといった。

ところがじゃ、十年ほど後に

マロンもキリオンも死んでし

まった。」

カナ「まあ、なんてかわいそ

うなんでしょう。オリカ、あなただうする。」

オリカ「あたしなら、夫のあとを追って死ぬわ。」

サヒロ「おい、オリカ、お前にそんな気持があるなんて今まで聞いたこともなかったぞ。」

オリカ「失礼なことじゃないでよ、サヒロ。あなただって……」

マダク「おいおい、そんなところで争わず、ウノイの話を聞こう、ウノイよ先へ進んでくれ。」

ウノイ「大きくうなずいて」「そこでナオミは、嫁と共にモアブの地を離れて、ふるさとのユダの地へ帰ろうとしたのじゃ。しかし、ナオミは二人の嫁をそのまま連れて帰るのがしのび難く……」

ナオバ「なぜしのびないのだ、ウノイよ。」

ウノイ「ナオバよ、二人のやもめたちはまだ若い、再び夫を持ち楽しい暮らしが出来るではないか。ナオミもまたそのように思ったのじゃ。」

サヒロ「オリカと同じだ。」

オリカ「まあ、またサヒロは、サヒロ——笑う——」

ウノイ「さーて、と、どこまで話したかな。」

マダク「ナオミが二人の嫁を連れて帰るのがしのび難く、まだだ。」

ウノイ「おお、そうじゃった。」

さて、ナオミはそこで今までの親切を感謝し、二人の嫁に再び主が夫を与え、身の落着き所を得させられるようにと言って別れようとしたのじや

ところが二人は声をあげて泣きながら、口をそろえてナオミに言った。わたしたちは一緒にあなたの民のところへ帰ります、とな。」

カナ「まあ、なんと美しい話。」

ウノイ「しかし、ナオミは娘たちに自分は年をとっているの

で再び夫を持つことが出来ない。また、たとえ夫を持ち、子を産む望みが出来ても、そのために子供の成長するまで待つて、その間中娘たちは夫をもたずにいるつもりなのかと聞いた。ナオミは順々とさとしたのだ。彼女らはまた声をあげて泣いた。そして、オルバはしゅうとめに口づけをしたのじや。」

ヒヨロム「口づけをしたということは別れることを承知したのだな。」

ウノイ「その通りじや。だが、

ルツはしゅうとめから離れなかった。」

オリカ「ルツって、あたしみたい。」

ナオバ「オリカよ。お前がルツのようだったら、まだ夫を持たないの不思議だよ。」

オリカ「まあ、にくらしい。」

マダク「——二人を静止させる——」

ウノイ「ナオミにオルバの方が帰ったのだから、ルツもモアブの地へ帰るように言ったが

ルツはガンとして聞かなかったのじや。あなたと別れて帰ることをわたしに勧めないで

下さい。わたしはあなたの行かれる所へ行き、あなたの泊られる所に泊ります。あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神、あなたの死なれる所でわたしも死んで、

そのかたわらに葬られます。もし死に別れてなく、わたしがあなたと別れるならば、主よどうぞいくえにもわたしを罰して下さい、とな。」

カナ「すばらしい言葉。」

ウノイ「ついにナオミも、その決心の固さに負けて、二人は旅を続けて、ベツレヘムに着

いたのじや。町はこぞって彼女らのために騒ぎ立ち、女たちは言った。これはナオミですか、とな。」

ヒヨロム「ウノイよ、ナオミはなんて幸少なき女なのだ、ナオミというよりマラと呼ばれるにふさわしい女ではないか。」

ウノイ「そうじや、かしこきヒヨロムよ、お前の言う通りじや。ナオミとは楽しみの意味じゃが、苦しみという意味のマラという呼び名の方がいいかも知れないな。実はナオミもそのように町の人たちに言ったのじやよ。」

——突然、テントの外騒しくなる。しばらくして、二人の兵士が息せき切って入ってくる。デブプリ太ったのはハサジといい、細く黒いのはキノブである。——

兵士ハサジ「大変だ、われらイスラエルの軍は負けそうだ。」

兵士キノブ「おいノ皆んな。逃げ出そうノ敵のベリシテビとの軍にすごい男がいるのだ。」

マサベ「そんなに強い男がいるのか。」

ハサジ「そうだ、そやつの名はガテのゴリアテという戦士だ

身のたけは六キュビット半、頭には青銅のかぶとを頂き、身にはうろことじのよろいを着ていた。そのよろいは青銅で、重さは五千シケルもあるというものだ、また、足には青銅のすねあてをつけ肩には青銅の投げやりを背負っていた。」

キノブ「そうなのだ。手に持っているやりの柄ははたおりの巻き棒のようであり、やり棒先の鉄は有に六百シケルもあるうか。そやつが大声で呼びかけるのだ。一騎打ちの勝負をしよう。だが、われらサウル様の率いる軍からは誰もそれに応じようとするものがないのだ。」

ハサジ「遅からず、ゴリアテを先頭にベリシテビとがせめ込んでくる。今のうちに逃がれるだけ逃げよう。」

ウノイ「立上って「うろたえるなノ」ウノイの声は今までの語りでは想像も出来ないような大きな声をはり上げて二人の兵士をしかった。二人の兵士は首をちぎめて上目使いでウノイを見上げる。ウノイの声続く。」

ウノイ「ハサジにキノブよ、お

前たちは主の軍勢を見捨てるのか、主はイスラエルを守りたもうぞ。かならずや若き強者がそのゴリアテを倒す。二人とも行け、サウルの軍に立帰れ。何をおそれるか、必ず勝つじや、行け。」

——二人おどかされて、すぐ出てゆく。しかし皆は落着かずそわそわ小声で話合う——

ウノイ「兄弟たちよ、心を安らかに持て、大丈夫じや、騒ぎなさるな。」

サヒロ「ウノイよ、だれが騒がないでか、ゴリアテという強者がせめてくるとのこと、命あつてのものだねだ。」

ナオバ「そうだ、サヒロの言う通りだ。皆んな逃げよう。」

ウノイ「いかにもあきれたという顔で「なぜわしの言うことを聞かぬ。必ず勝つじや。」マサベ「ではウノイよ、その話を聞こう、なぜ勝つのだ。」

ウノイ「さればじや、今までの物語もそれとかかわりがあるのじや。」

マダク「では続けて話してくれ。」

——やつと皆、一応落着き、それぞれ再び腰をおろす——

ウノイ「さて、ナオミとルツがベツレムに帰り着いたのはちやうど、大麦刈の初め頃じやつた。ルツは自分とナオミのために、畑で落ち穂を拾つたのじやが、彼女は、はからずも、エリメレクの一族であるボアズの畑の部分に來たのじや。」

——しばらくそわそわしていた一同もようやく、ウノイの言葉に再び耳を傾け始める。ウノイの淡々とした語り口は続く。

ウノイ「ちやうど、ボアズがそれを見て、その女が誰であるかを、麦刈りを監督するしるべにたずね。その女が、自分と親戚であるナオミの死んだ息子の嫁と聞いて、ルツに、自分の畑からだけ落ち穂を拾うようにと言ひ。その上、召使いたちには麦の束からわざと落穂を抜いて落としておくように言ったのじや。」

カナ「なんて情深いお方。」

ウノイ「このようにして、大麦刈と小麦刈の終るまで、ルツはボアズお畑で落ち穂を拾うことが出来たのじや。」

マサベ「しゅうとめのナオミも喜こんだらうな。」

ウノイ「そうじや。ナオミはこのことを聞いて、主に感謝しボアズに祝福があるように折つたのじや。こうして、二人はしばらくの間、暮したのじや。」

——間——皆、ウノイの次の言葉にかたずをのむ。

ウノイ「さて、ナオミはどうしてもルツをしあわせにしてやりたかつた。ルツの落着き所を求めてやりたかつた。」

オリカ「ルツは再び夫を持つのですか。」

ウノイ「まあ、そういそぐでない。——間——ある夜、ナオミはルツに身を洗わせ、油をぬり晴れ着をまとわせ、ボアズのところへ行かせたのじや。それは美しい娘になつてな。」

ナオバ「——身を乗り出し、生つばのみ込む——

サヒロ「おい、おい、ナオバ、なんだそのかつこうは、身を乗出したからといってルツがお前のところへ来るわけでもあるまい。」

ナオバ「——ニガ笑いしながら身をちぢめる——

一同「——笑う——

ウノイ「——間——そこでルツはナオミからいわれた通り、

ボアズの家に行ったのじや。ボアズはルツをいとしく思ひ大麦を六オメル、ルツのところへ、ひとたび帰したが、ボアズは近い親戚として、なんとかしなければと思ひ、町へ出て、最も近い親戚にルツをめぐともらおうとしたのじや。そのため、証人に町の長老十人をも集めた。そして親戚の者にナオミの地所を買つてくれるよう。また、そのとき、同時に死んだ者の妻であつたモアブの女ルツをも買つて、死んだ者の名を起してくれるよう頼んだが、その親戚の者はことわつた。」

マダク「なぜ、その親戚の者はルツをあがなわなかつたのかウノイよ。」

ウノイ「ウム、それについて、彼は言うのた。死んだ者の名をあげるためには自分の嗣業がそこなわれるのと。」

マサベ「ウノイよ、それで、ルツはどうなつたのだ。」

ウノイ「ウム、マサベよ、ルツはな、ボアズに買われたのじや。」

カナ「まあ、よかった。」

サヒロ「したり顔で「こうなると思つたよ。」

オリカ「なにいつているの、知りもしないくせに。」

マダク「先を頼む、ウノイよ。」

ウノイ「静かにうなづいて「その親戚の者はじや、ボアズに自分に代つて、ボアズがルツをあがなうようにいつたのじや。そして、ボアズに自分のくつを脱いで渡したのじや。」

ヒヨロム「ウノイよ、そのくつを脱いで渡す意味を聞かせてほしい。」

ウノイ「もつともじや。これはな、昔イスラエルでは物をあがなう為と権利の譲り渡しについて、万事を決定するときのならわしがこうであつたのじや。ちやうど、この場合、

ナオミの地所とルツを買ひ、権利を親戚の者がボアズに譲り渡したことのあかしじやよ。——間——さて、そこでボアズはナオミの死んだ夫エリメレクのすべての物、及び死んだ息子キリオとマロンのすべての物をナオミから買い取り、マロンの妻であつたモアブの女ルツをも買つて、自分の妻として、死んだ者の名を起こし

その嗣業を伝え、死んだ者の名を一族から、また、その郷里の門から断絶しないように

したのじゃ。そして、その証人には町の十人の長老たちがなったのじゃ。」

カナ「よかったわ、しあわせになつて。」

ウノイ「こうして、ボアズはルツをめとって妻とした。主は彼女をみごもらせたので、一人の男の子を生んだ。この子の名をオベデと呼んだのじゃ。」

ナオバ「ウノイよ、先ほどから聞いているが、少しも今のペリシテびとの戦いとはかわりがないように思えるが……。」

ウノイ「まあ、待て、もう少しじゃ、実はじゃ、オベデの子とは……。」と言いかけたとき外、騒わがしくなり兵士のハサジとキノブ歓声を上げながらテントに入ってくる。

(ハサジ)「勝ったぞ、勝ったぞ、イスラエルが勝ったぞ、ゴリアテが倒れたぞ!!」

皆、まだ意味がよくのみ込めない風である。ウノイだけは違う——

ハサジ「オイ、皆んな聞け、敵の強者ゴリアテは倒され、われらサウル様のイスラエル軍は勝利を得たのだ。」

皆ワーッと歓声を上げる

立上る、ウノイのみ一人座して語らず——

マダク「ハサジにキノブ、その戦いの様子をわれわれにくわしく聞かせてくれ。」

キノブ「もちろんだ。われらイスラエルが戦列をしいて、ゴリアテと相対していたときだった。われらはゴリアテのいきおいで多くの者が逃げようとしながら、みんな言いあつたのだ。あの、戦いをいどんで上つて来たペリシテびとのゴリアテを殺した者には、王の富とその娘が与えられ、その上、その父の家は、イスラエルのうちで税が免がれるであらうと。」

ハサジ「それをかたわらできいていた一人の年若き者が、そのペリシテびとを殺すというのだ。その少年の名はダビデといい、ユダのベツレヘムにいたエフラタびととエツサイという名の人の子なのだ。彼は八人の子供のうち兄の三人はわれわれ同様、戦さに出て

いるのだ。ダビデは末の子で羊飼だが、父のいっつけで兄たちに食物を渡すために陣地に上つて来たのだ。」

キノブ「ところが、こともあ

うに、そのダビデがああ巨人を殺すという。そのことがサウル様の耳にまで入り、サウル様が自らダビデに、とてもかなうまいからよした方がいいといひ、たのだ。」

サヒロ「そりゃ、そうだ。身のほど知らずもいとこだな。」

オリカ「お前は弱虫だからね。」

サヒロ「なにお、」

マダク「よせ、二人の話を聞こう。」

ハサジ「しかし、ダビデは羊を飼っていて、シシやクマを殺して羊を守っているから、あの割礼なきペリシテびとも、シシやクマと同様に殺すことが出来るというのだ。」

キノブ「その上、ダビデはこのようにも言った。シシのつめ、クマのつめから自分を救つてくれた主は、ペリシテびとの手からも救い出されるだろう。」と。」

カナ「頼もしいわね、オリカ。」

オリカ「そうねえ、カナ、サヒロと比べたら断違いね。」

サヒロ「にらむ——」

ハサジ「ついに、サウル様も許して、自分のいくさ衣と青銅のかぶとをかぶらせようとしたが、ダビデは慣れていない

からといって、手につえをと、谷間からなめらかな石五個を選びとつて、持つていた羊飼の袋に入れ、石投げをたずさえて、あのペリシテびとに近づいたのだ。」

——一同、かたずをのむ、ハサジとキノブの語り口、次第に熱をおびてくる——

キノブ「巨人のゴリアテと向いあつたダビデの姿は小さいがいかに頼もしかった。」

ハサジ「しかし、ゴリアテは戦列より出て来た者が、まだ年若い少年なので侮った風だった。つるぎとやりと投げやりとを持って、向つてきた。そして、やりを高くかざして、今にもダビデを一突きにと、とびかからんとしたそのとき

ダビデは袋の中の一つの石をとり、石投げでペリシテの頬を撃つたのだ。さすがのゴリアテもうつむきに地に倒れてしまった。」

キノブ「こうして、ダビデは石投げと石とをペリシテびとに落ち、これを殺したのだ。ダビデは手につるぎがなかった

ので走り寄つて、ペリシテびとの上に乗り、そのつるぎを取つて、さやから抜きはなち

それをもつて、彼を殺し、その首をはねたのだ。」

ハサジ「ペリシテのやつらはゴリアテが殺されたとみるや、一目散に逃げていったのだ。我らはそれを追撃しこのように勝利をあげた。サウル様が凱戦する前に、われらはいち早く知らせに帰つたのだ。」

キノブ「イスラエルの勝利はダビデのおかげなのだ。もうすぐ、サウル様と共にダビデが引揚げてくる。さあみんなて出迎えよう。そしてほめたたえよう。」

ハサジ「ダビデを歓迎しよう。」

ナオバ「よし、みんなで行こう。」

サヒロ「よし、行こう。」

一同「行こう、行こう。」

——皆、立上つて退場しようとする。そのとき、ウノイやおら立上つて皆を止める——

ウノイ「しばらく待て。」

一同「ふりむく、げんな顔——」

マダク「どうしたというのだ、ウノイ。みんなと行かないのか。」

ウノイ「そうではない。ダビデを迎えに行くのはよいが、その前に一言だけ話しておこ

う。」

——聞——

ウノイ「先ほど、最後に言おうとした言葉じゃ、実はじゃ、ボアズの妻になったルツが産んだ男の子の名はオベデじゃ。」

ナオバ「それはさっき聞いたよウノイ。」

ウノイ「ナオバ、あわてるでない。そのオベデの子じゃ、エッサイなのだ。そして、ダビデがエッサイの子であるということはさっきハサジも言ったであらう。」

カナ「まあ、あの美しいルツの子供が、ダビデなのですか。」

ウノイ「そうじゃ、しかも系図をたどれば、ダビデはアブラハムに続くのじゃ。よいか兄弟たちよ、ダビデは主より祝福された家系の者じゃ。わしは、はつきりと言う。ダビデは違からず、このイスラエルの王となるであらう。」

——荘厳な音楽、次第に高まる。舞台、いつの間にか、明るく輝いている。ウノイを中心に、一同退場——

——喜びながら……——

——幕退中で、音楽静かになる——

ナレーター「確かに、ダビデは王となった。ダビデはソロモンの父であった。そして、ソロモンより数えて、二十五代目、ヤコブといわれた者がいた。そのヤコブはマリヤの夫ヨセフの父であった。このマリヤから、ユダの大きな星、そして世界を救う偉大な星、キリスト、イエスが生れたのである。」

——音楽次第に高くなる——

——そして静かに消える——

作者のことば

この「ユダに降る星」はクリスマス演劇として創作しました。

内容は旧約聖書のサムエル記上の十七章の事柄を背景として劇中語られる物語はルツ記全篇を要約したものです。

題名の「ユダに降る星」はイエス・キリストをさしたものです。が、ルツ記の美しさ、ダビデの少年時代のエピソードを織り込み、イエスの系図を知らせることを目的としました。

上演に際しましては場の設定登場人物の衣装、職業等は適当

に応用してそれぞれ各演劇グループの持ち味を出してやって下さい。ただし、音楽効果と照明の出来いかんがこの劇の成功不成功の鍵をにぎるかも知れません。もちろん、キャストの方も充分練習をつまなければなりません。

なお登場人物は適当に増加させて、せりふを分担させても面白くなると思います。(群衆の感じを出すため)

この脚本についての御意見、御感想、御質問を歓迎致します。

支部で上演する際、作者の方へ御連絡願えれば幸いです。

作者住所

東京都練馬区北町二の四一
の一四

高橋 実
TEL(九三三)四四二二

伝道部聖徒の道委員会開かれる

十一月十六日午後七時から、

伝道本部の伝道部長室に於て伝道部聖徒の道委員会の初会合が開られました。この会はこの度新しく組織されたもので、伝道部長のもとに、二人の副伝道部長と伝道部日曜学校会長、伝道部YM・YW・MIA会長、伝道部扶助協会会長、伝道部系図アドバイザー、編集印刷担当者予約発送担当書記とによって構成されるものです。

組織

伝道部	委員	委員長
聖徒の道	委員	委員長
伝道部長	委員	委員長
以下は本文参照	委員	委員長
聖徒の道	委員	委員長
地方部長	委員	委員長
聖徒の道	委員	委員長
支部長	委員	委員長
聖徒の道	委員	委員長
支部分長	委員	委員長
聖徒の道	委員	委員長
支部分長	委員	委員長

定価変更

現在一部八十円で販売されているものを一九六七年一月号から一部七十円で販売されます。

一年予約定価変更

一年間十二冊を予約する人には七百円で予約を受付けます。そして十二冊をまとめて一冊の本にできるカバーを合せてさしあげることになります。

第 14 課

イエス・キリストは私たちが復活

できるようにしました

家族のタテキストつづき

「目標」

貴方の家族のすべての者がキリストの復活はすべての人のために死を克服したことを知ることによってもたらされる喜びと平安を経験するように助ける。

「折り」

「先週の割当（宿題）による

貴方の進歩を決定しなさい」

若しも各人が今週中実施した決断を秘密にしていたら、家族たちをして彼の行動から当てさせなさい。各人がもたらした如何なる成功をも褒めてあげなさい。家庭的なふんいきで家族のなした努力の効果を指摘しなさい。各人が実施した同じ割当を来週にも続行するか或は新しい割当をすることも出来ます。貴方は各人の態度と彼がもたらした進歩によってその正しい決断が習慣となる迄同じものを続けるかまたは新しいものとするか決めることが出来ます。貴方は家族が全体としてなしていた何か悪い決断を遡んでもよいでしょう。例えば貴方の家族の祈りが不定期であったら、定期的なものとしようと決め、朝晩どのようにして皆が集ることが出来るか話し合い、そこで貴方の決断に従うようにします。

「レッスン」

すべての人は復活します。

このレッスンを始めるに当たって次のようにたずねてもらなさい。

「貴方が今迄世異中で聞いたことで最も嬉しかったことは何ですか？」

何らの注解も加えずに各人をして少し考えさせ、それから一人づつ答えさせ、また彼が選んだことが世界一に幸福であると考ええる理由を述べさせなさい。一番小さい者に先ず答えさせなさい。このときその答えに何ら注解を加えないようにしなさい。

彼らの考えを結合して真の答えに導くように第十一課から次のことを復習しなさい。

何故私たちはこの世に送られたのでしょうか？（私たち自身を証明し、肉体を得るため）

何故私たちは肉体を必要とするのですか？（霊は肉体なくして完成されないからです。私たちの天父は肉体を持って居り私たちの人生の目標は彼のようになることであります）

私たちが死んだときに肉体を失うからには、肉体を得ることには何の益があるのでしょうか？

（キリストの復活により私たちは皆復活して再び肉体を受けました）

皆が復活が何を意味するか理解したかどうか見なさい（復活は霊と肉体が再び結合することであり、霊は死によってその肉体を失います。復活によって霊は再びその肉体をとるのであります。復活してからはそれは不死不滅の肉体となります。言い換えれば人はもう死なないのであります）

各人が私たちの救主の復活により自分自身の復活が確かなものであることを知るように助けなさい。私たちの贖主イエス・キリストは死後再び彼の肉体をとる力を持って居りました。私たちは私たち自身の中にこの力を持って居りません。若しも彼が自ら殺されることを肯ぜず復活をもたらさなかったら私たちは再び肉体を得る望みを持たなかったででありましょう。彼は義人ばかりでなく、この世に生れたすべての人に復活をもたらしたのであります。

すべての人が復活することの聖文の証拠として貴方は聖書から共に読むことを望まれるでしょう。（特に貴方の家族が若い

人や成人から成っている場合に) ヨハネ伝五章二十八節二十九節にイエスは、善人も悪を行つた人も共に復活するであろうと申して居ります。

このことを驚くには及ばない。墓の中にいる者たちがみな神の子の声を聞き、善をおこなつた人々は、生命を受けるためによみがえり、悪をおこなつた人々はさばきを受けるためによみがえってそれぞれ出てくるべきが来るであろう。

モルモン書九章十三節十四節も同様の考えを与え、裁きがその復活に従うことを追加して居ります。

家族たちがイエスの復活が如何に喜ばしいものであるか感ずるように助けなさい。下記は貴方が用いてもよい提案であります。

前回のレッスンで私たちは、この世に於ける人の生涯に就ての考えを描いた絵に就て語りました。それは人が重く暗くたれ下つた二つの幕の間を助けもななくさまよっている姿でありました。イエス・キリストの復活がないものとしたらこの絵は真実であります。若しも死後私たちの肉体が永遠に墓に留るものと

したら人生は目的のないものとなるでありましょう。けれどもイエスは私たちの復活をもたらしました。貴方の私の、すべての人の復活をもたらしたのであります。こういうわけで、これが全世界に於て恐らく最も喜ばしい事件となるのであります。

「イエス・キリストの死と復活」

家族たちにイエス・キリストが彼らのために何をしたか理解させるために新約聖書から、キリストの死と復活の話を共に読みなさい。レッスンの前に家族の各人にそれぞれ異つた部分を割当てておくとうるしい。各人が各々の部分をよく学んで感謝と敬虔の念を以て読むことが出来るようにしてすべての人が話のすべての部分を楽しむことが出来るのであります。

読むときに間があかないように誰かを指名して読む順番を指名させなさい。各人が参照章節を抜きにして読ませなさい。各人が未だ当てなくキリストの受難に悲しみを復活に喜びを感じたかどうかたずねてごらんない。読むにつれてそれぞれの情景を心に描くようにすすめなさい。

下記の参照を用い簡単な説明を加えることによって、何が起つたかはっきりした絵を家族に与えることが出来るでしょう。

イエスの死

一、イエスは殺される前に使徒たちと共に晩餐をとりました。食べているときに彼は以前にしたことなかつたことを致しました。私たちは今でも教会でそれをして居ります。

ルカ二二・一九―二〇(参照一番及び二番は同一人によって容易に読めます)

二、晩餐が終つてから彼等はゲッセマネの園に行きました。ルカ二二・三九―五四(最後の文を退く)

三、私たちは次に大祭司の邸宅でイエスに何が起つたかを学びます。

マルコ伝一四・五五―五六
六〇―六五

四、祭司長はイエスをローマの総督ピラトの処へ伴いました。何となればピラトの同意なくして彼を殺すことは出来なかつたからであります。

ヨハネ伝一九・一一―一二、一六―二一
五、次の部分が読まれている間にイエスが死ぬ前に六時間も

の長い間、十字架の大きな苦しみにかけられている絵を描きなさい。

マタイ伝二七・三九―四三

ルカ伝二三・三四(五番と六番は同じ人によって読まれて結構です)

六、今や私たちは、イエスの肉体に何が起つたか学ばせよう。

マタイ伝二七・五七―六六

イエスの復活

七、土曜日であるユダヤの安息日の間にイエスの肉体は墓の中でありました。三日目の日曜日の早朝迄、何事も起りませんでした。

マタイ伝二八・二―四

マルコ伝一六・一―四
八、マクダラのマリヤは墓が空なのを見て驚き、走って行ってベテロやヨハネの兄弟たちに告げました。

ヨハネ伝二〇・二―一八

九、さて墓に居た他の女たちにはどのようなことが起つたでしょうか。

十、兄弟たちに告げに行く途中で女たちは榮えある経験をし彼らもまたその心を騒がせた或大きなことを学んだのでありました。

マタイ伝二八・八―一五
十一、その日の遅く二人の弟子がイエスを見、その後、彼の使徒たちが彼を見たのでありました。

ルカ二四・一三―四六

十二、イエス以外の人々はイエスが復活してから復活しました。

聖句が読まれるにつれその中の集解な言葉は貴方は説明したいと思うでしょう。けれどもあまり煩雑に話を中断させることは却つてそのメッセージを害つてしまふでしょう。屢々言葉の意味がわからなくても全体の意味が明瞭に理解されるのです。家族たちの反応に導かれるようにしなさい。

読み終つたら家族をして彼らの感じ及び印象を述べさせなさい。

「復活を信ずることはこの生涯に於ける、喜びと平和をもたらします」
私たちは時々愛する人たちの死に直面します。
成人として貴方自身の経験を聞かせ、そのようなときに貴方が復活を信ずることによって個

人的にもたらされる平和と喜びに就ての証を述べなさい。十代の少年は数年後にそれを自分の経験として語るようになるのであります。彼は幼少の頃に復活に就て教えられても、彼が病気で入院する迄は実感が伴わないのであります。

復活を信ずる

夜明け前の暗い病院に痛みにねむられず、疑惑の念にかられながら私は一人ベットに横わっていました。私は、若し人が死んだら再び生きるであらうか?と云うヨブの質問に憑かれ悩まされていました。

私は死にれうではありませんでした。けれども私についてのすべては苦痛であり、不安定であり、死でありました。私は人のこの地上に於ける状態に於て考えました。或ときには喜び、或ときには悲しみですが常にその道の終点は死であります。その暗黒の中に私は不安を覚え私は祈りによってそれから逃れようとした。

これは二十五年前の小さな町の小さな病院のことでした。冷たい空気を入れるために窓は開放されてあり私の思いは街の歩道を急ぐ足音または廊下の足音に

乱されました。またその音は静かな看護婦の質問や、続いて指示を与える医者の方によって中断されました。

道路事故によって二人の若者が運ばれて来ました。酔っぱらいの運転していた自動車トラックの運転台に衝突したのでした。トラックの人は牛を運搬してその長い道程を終える処でした。

どちらの若者も危篤の状態でありました。直ちに彼らは私の部屋から数間はなれた外科に入れられました。間もなく両方の父親が見えました。私は彼らの声を聞いたので上衣を着、スリッパを穿いて出て行きました。一人は色あせた作業衣を着、瘦身で褐色に日やけた牧場主でありました。彼の手は硬く眼は光っていました。

他の一人は裕福な社会の人でした。多年の放縱な生活に顔も肉体も無気力になって居りました。彼は誰の助けをも要せず特に天父の助けなど必要でないと感じて居りました。彼はその不安な気持を以て周囲の人に拵たりちらかし、苛酷な知らせがもたらされると彼の息子を死なせた神を不正であると非難

しました。彼はその生涯に於て恐らく始めて、自分の力で開くことの出来ない扉に直面したのであります。彼は死後の生の希望なくして死に直面する人の恐怖におそわれたのであります。すべての富を持っていながら彼の心は貧弱だったのであります。

私はどちらともお話をしました。けれども遂に牧場主に向いました。彼と私は共に隅の方へ行つて祈りました。彼は只言葉の口にしただけではありません。彼はへり下つて、確信を以てけれどもすべて神の御意志に任せながら神とお話をしたのでした。彼は落付いた深い関心を以て、とりみだすことなく動作し話しました。彼は盲目に運命に従うことではありません。それは神に近い理知的な人の偉大な落付きでありました。

彼の心は気高く、強く、冷静でありました。私は彼の側に立っていてそれを感じました。私は共にその気持を分ち合つたことを光榮に感じました。彼の息子が死んだと告げられたとき、彼は私に向つて「私と共に待つて下さつて感謝します」と言いましたが私はそれが私の胸につけ

られたメタルのように感じました。彼がごつごつしたこぶしで涙をぬぐつて出て行つたとき、私は彼が疑いを持てないことを知りました。彼にとつて復活は、はっきりしていたのであります。彼はヨブの質問に肯定して「はい人は再び生きます」と答えることが出来たので

す。そしてここ及び現在と復活との間によい道路が横わつて居りそれは恐れ、疑い、不安によつて陰さされる必要はないのであります。彼が立ち去つて行くときに私はよい生涯は価値ある人格と、強さと信仰の永遠の祝福を以て報いられることを知りました。

私は彼が自分では知らないが私が口にした祈りに答えてくれた彼のレッスンに感謝しつつ部屋に戻りました。

今日でもあの遠い昔の夜に、あの牧場主が保つていた平安が私の心に留つて居ります。私は再び生きるであらうことを知つて居ります。「私たちの家族はイエスが私たちを復活出来るように死んだことを覚えるであります」

貴方は家族たちが単に復活があると云うことを知るだけにな

く靈的にそれを深く経験するように望むでしょう。次の提案はそれを助けるかも知れません。

質問する

復活祭の日曜日は何ですか? (イエスが墓から出て来て再び生きた日曜日を記念して礼拝する神聖な日)

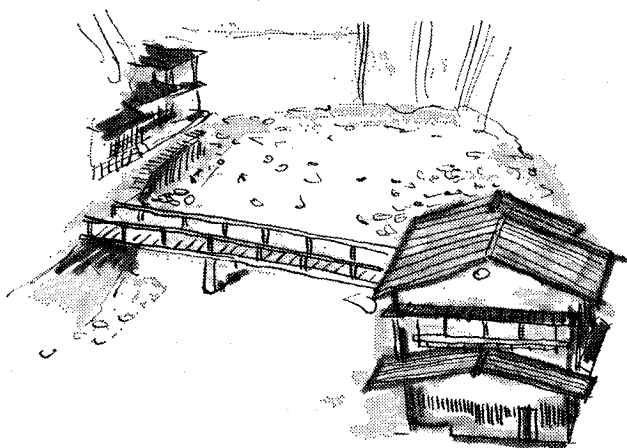
私たちは家族として復活祭にイエスを崇めるためにどんな特別な方法があるでしょうか? (家族たちに暫く考えさせてそれから意見を述べさせなさい。提案された如何なるよい提案でも用いようにしなさい) 次の事項をも考慮に入れなさい。

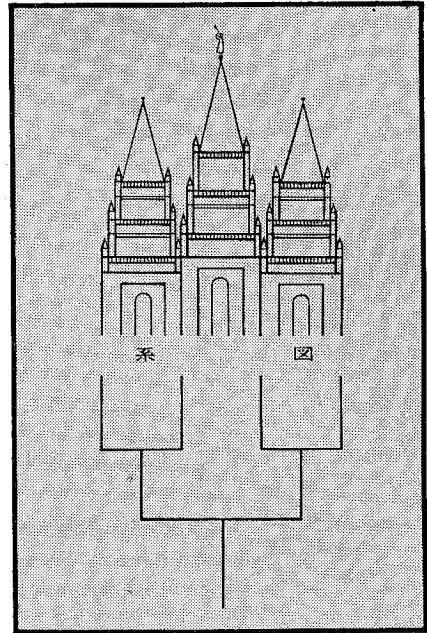
復活祭に家族中で聖餐式に出席します。聖餐式に行く前に特別な家族の祈りをして、天父に各人がキリストの復活に思いを集中しそれが各人にとって如何に大切なものであるかに思いを致し、またイエスが死ぬ迄私たちを愛したので私たちが復活出来るようになった喜びを感じる事が出来るように助けて下さるよう頼みます。この祈りに対する回答を得るために、各人はそれぞれ自分自身で努めねばなりません。聖餐式の間に各人は何をせねばならないか討論しなさい。

一、早く行って敬虔な音楽が始まる前に着席していなさい。
音楽を聞いて集会の最初から礼拝のみたまを感じるようにしなさい。
二、すべての祈りを聞きなさい。祈る人が言っている祈りを貴方自身の心に祈ることによって、それを貴方の祈りとしなさい。
三、集会の歌に参加し、歌の言葉のメッセージをくみとりなさい。集会中で用いられる音楽を通じてみたまを感じなさい。
四、話す人のために祈り彼らのメッセージをくみとるようにしなさい。
五、聖餐の間にイエスの受難と復活に思いを致し、そのために貴方が如何に祝福されているかを思いなさい。家族の者が聖餐をいただくときに必要な助けを与えない。質問と提案によって次の考えをのばさなさい。
最後の晩餐のときイエスは何をしたと私たちは聖文で読みましたか？（聖餐を紹介する）
私たちは何故聖餐をいただくのですか？（イエスは、わたしを記念するため、このように行

うなさい。と言われました）
彼は何を意味したのでしょうか？（聖餐が配られているときに私たちは彼のことを思いまた彼が私たちのためになしてくれたことを思うように）
このレッスンの一部としてキリストの受難と復活の話を読み私たちは復活祭の聖餐をいただくことによってこれらすべてを思うことが出来る筈であります。
家族たちをしてその心の中にこれらのことを見ることが出来るかその詳細を復習させなさい。他の提案と共に次のような見出しを列挙すると助けとなるでしょう。
聖餐式の間にイエスを崇めて私は、
一、敬虔は音楽を聞きます。
二、集会でお祈りする人と共に祈ります。
三、合唱に加わってその歌の言葉の意味をくみとります。
四、話す人のために祈って、彼らのメッセージをくみとるよう努めます。
五、聖餐の間にイエスを思いま

す。
(a) 彼の捕縛と裁判
(b) 彼のはりつけ刑
(c) 彼の復活
(d) マグダラのマリヤその他の女たちへの彼の現れ
(e) エマオに向う退上の二人の弟子への彼の現れ
(f) 使徒たちへの彼の現れ
(g) 私もまた彼の故に復活するでしょう。
聖餐式後に、一定の時間を定めて恐らく夕食時に家族が難って、教会の聖餐式で彼らが得た経験に就て話合うようにします。集会に於ける状別プログラムが彼らに如何に異った喜びをもたらしたか、また復活に就ての彼らの感想を観察しなさい。
「歌」
讚美歌集二十二番。主はよみがえりぬ。
若しも家族がメロディーを知らなければ、彼らがこのレッスンの聖神をくみとるように言葉を読みなさい。若しよければ聖餐式の歌を歌うとよい。例えば七十三番。主のみ名をたたえん。などあります。
「閉会の祈り」
祈りを霊的な経験としなさい。復活に就て、貴方の喜び、感謝、及び希望に就て心から天父と語りなさい。





日本の地名について

家族の記録用紙上、出生地、結婚地、死亡地等の地名をどのように記入していったらよいかの簡単な説明。

国名『日本』は、ジャパンと英語化して記入される。そしてそれを「JPN」と省略してもよい。その外の地名の省略形は日本の記録にはどこにも使用してはいけない。もし省略形の必要なときは、系図協会本部記録部に於てのみ決めることが出来る。

地名はすべて明確に漢字とローマ字とで記入されなければならない。

次に家族の記録用紙上に記入される主な地名は、区、市、町、村、郡、都、道、府、県である。

家族の記録用紙の中の子供の出生地には TOWN、COUNTY、COUNTRY と三つに別れているが、TOWN の欄には町、市、村、郡、大都市の場合は区名を記入し、COUNTY の欄には、都、道、府、県名を記入する。COUNTRY は漢字で日本、英語で JPN と入る。

東京、大阪、京都等の大都市であり県名（都、府名）が市の名称と同じときは、区名を書き市名を COUNTY 欄に記入する。その外は必ず市名と県名を明記する。日本の旧植民地または旧領土内であった国は別々の国として記入される。例えば、韓国、満洲、マリアナ群島、琉球台湾のように記入する。

もし家族の記録用紙に記入された地名が変更になり新しい名称がつけられたときは、用紙下段にある「備考」欄に新しい地名を記入する。

家族の記録用紙に記入する地名の例

- 日本、北海道、札幌郡、広島村
- 日本、東京都、大田区、羽田町
- 日本、福岡県、北九州市、八幡
- 日本、北海道、利尻島、東利尻村

琉球、沖縄、具志川村、塩屋

旧日本植民地で生れた人は、出生地名を日本が使用していた地名を書き込み、下段備考欄に新しい現在呼ばれている地名を書く。例、家族の記録用紙には、満洲、奉天市、稻葉町、と記入、下段備考欄に、中国、瀋陽市、大同街と記入する。

中国、フィリピン、南アメリカ、インドネシア等の外国で出生した場合は、その国の使用している地名を書き英語化された国名を記入する。

日本人のための家族の記録用紙上の埋葬年月日及び埋葬地について

死者を火葬にすることが日本の習慣として今までも今も行われています。今までに日本人の系図のために、家族の記録を作成するときその中の記載しなければならぬ埋葬とゆうことについて非常に曖昧で、時々間違っている理解されて来ました。

そこで、その不明瞭な点をのぞき問題を解決するためにこれらの規定をもうけました。これらの規定にすべてが含まれ

ているわけではなく沢山の例外もあることとでしようが、一つの道しるべとして役に立つと思います。

(系図作成上死亡年月日は、最も大切なものであります。しかし、埋葬年月日と埋葬地は、第二次的に必要なものであり、必ずしなければならないというものではありません。)

一、埋葬

埋葬とは、死者を地中に埋めることです。あります。この場合、埋葬年月日と埋葬地は判明していますので、家族の記録にそれを記入すべきであります。

二、火葬

普通火葬は、死亡日より一日または二日後に行われます。その後度々遺骨は墓に埋められず寺院にあずけられる。また自宅で保管する場合があります。そのため埋葬年月日がないことになりますので埋葬年月日を記入する必要があります。埋葬地は、遺骨の安置してある家の所在地、寺院の名、所在地を記入すべきであります。埋葬地は、有用な情報をすべて集め、それ等を記入すべきであります。

三、遺骨を他の地に移転する場合

遺族たちは時々遺骨を自分たちの故郷の家族の墓に先祖たちと共に葬むようまたその他の理由で移転します。(これ等の遺骨の移転の前にかんりの時間(年月)が経過することがあります。)この場合、一番最後に遺骨が、これからずっと

安置されるように移された年月日を埋葬日に記入されます。

例

一、普通の死(埋葬)

死亡年月日：一九四二年六月三日

死亡地：日本、滋賀県、大上郡、豊郷村

埋葬年月日：一九四二年六月五日

埋葬地：日本、滋賀県、大上郡、豊郷村

二、火葬、後遺骨をどこかに安置する。

死亡年月日：一九四四年十二月九日

死亡地：日本、兵庫県、神戸市、長田区

埋葬年月日：(記入しない)

埋葬地：日本、兵庫県、加東郡、東条村

三、火葬、ずっと後に故郷に遺骨を埋葬

死亡年月日：一九四五年三月五日

死亡地：満洲、奉天市、稻葉町

埋葬年月日：一九五八年九月一日

埋葬地：日本、群馬県、前橋市、立川町

大連寺

あらゆる普通でない出来事、例えば、戦死、行末不明のようなことは説明と共に記入されなければいけません。埋葬墓地寺院名もわかれば必ず書き込むようになります。

昭和四十一年十月六日

東洋係 E・W・ジェンセン

すべての末日聖徒婦人の生活に於ける神権

社会科学—家庭での福音教授

扶助協会レッスン1月第3週の集会のために

アルバータ・H・クリスチャンセン

目的

如何にして末日聖徒の婦人たちは神権の祝福を与えらるゝことが出来るかを示す事

一九六七年レッスンの紹介

一九六七年一月の、家庭での福音教授のレッスンはメルケゼデク神権定員会で学ばれているレッスンと関係するよう計画された学習コースとして紹介される。このレッスンは教会のホーム・ティーチングプログラムを支持している。このコースと相互関係を通して、末日聖徒の婦人たちは、より明確に彼女の妻として、母としての役割を理解し、また、家の霊的指導者としての夫を助けるように勇気づけられる事が感じられる。このレッスンを通して望まれることは、父の役割、母の役割をより明確に理解すること、また両親は協力して子供たちに福音の原則を教え、家庭に福音を満たすよう、熱心に努力することである。父と母の役割への理解は、家族の種々の関係（夫と妻、両親と子供、子供同志の関係）への考慮を要求される。家族内での各個人の義務、教会や社会に於ける一単位としての家族の義務

が各レッスンの中で討論された。一九六六年の社会科学レッスンも、メルケゼデク神権定員会によって学ばれているものと関係したものが続けられるであろう。それらのレッスンはそれが関係する問題の中に婦人の地位とのつながりを説明するであろう。扶助協会の姉妹たちは、神権を授け最初のレッスンで、有利な地位に立つてであろう。（既に出版された、このレッスンに關係する神権会のテキストを参照できるなら）それ故、彼女らは通常、天父と御子と聖霊との御名において、人間家族の救いのために人が行い得るようまた、正しく行おう、人に与えられた神の権威としての神権の働きに精通するのである。（ウィズソー、ジョン・A・神権と教会管理、三三頁）彼女らは、教会それ自身が神権の生産物であると言う声明及びこの手段を通じて、永遠の父なる神は彼の神性な目的を成し遂げておられることを良く理解しているのである。

このレッスン

神権定員会レッスンの第一部が神権の問題を取扱っているので、このレッスンも同様にこの

偉大な力のいくつかの局面を扱うであろう。それは必ず非常に教義的なものとなり、

一、神の子、すべてに与えられる永遠の祝福としての神権。

二、婦人も預るであろう神権の特別な祝福。に就て考慮するのである。

すべてに与えられる永遠の祝福神権

ブリガムヤング大管長は神の御子の神権についてこのように云った。……それはこの地上にかつて存在し、今も存在し、そして永遠に存在するのである法律である。

あらゆる真理の力は、父なる神の胸中にある。それは、神が彼の永遠なる神権によって、彼の意のままに彼の子供たちに分け与えるのである。彼は真理の輝きと、栄光と力の王位を司るのである。

福音と神権は、神と同じ不死不滅と永遠の生命、また栄光の冠を得るための栄光と権威を所有し得るよう、神が彼の従順な子供たちを高め、救うために用いるものである。

前の引用文の趣旨を完全に理解することは、我々にとって不

可能なことである。しかしながら地上に住むすべての人、男性と同様女性も、神権の祝福にあずかる者であることは、明白である。

男は神権から生じる祝福とその所有に伴う祝福において女よりも大きな要求権を持たないのである。女性は神権を持つことが出来ないが、神権の祝福を共にする者である。即ち男性は神権を持ち、教会の神権に關する義務を行うが、妻は神権の所有から生じる他のあらゆる特権を夫と共に受けるのである。（ウィズソー、ジョン・A・神権と教会管理八三頁）

女性は神の娘であるので、この偉大な永遠の権威によって祝福されると云うことは明らかである。更に次の聖句では、とりわけ祝福はこの世でのみ適用されるものでないことを指適している。女性は常に祝福を受け入れやすい気持を持っており、もし福音の教えに忠実であるなら永遠を通して神権の力によって祝福を受けるであろう。

さて始めより在りしこの神権は、この世の終りにも在るものなり。（高価なる真珠 モー

セの書六・七)

有限の生涯に於ける特別な祝福
權威を以て代行する神權の使
者によってなされる儀式を通し
て神の娘にもたらされる神權の
特別な祝福とは何であろうか？
この特別な祝福を焦点に集める
ような何如なる機会があるだろ
うか？

(一) 幼児の祝福

(二) パプテスマと確認

(三) 祝福師の祝福を受ける

(四) 病氣の時の神權によるいやし

(五) 化の特別な諸祝福

(六) 個人のエンダウメント

(七) 永遠の結婚

(八) 神殿で死者に代って働きをな
す機会

(九) 教会で特別な召しを与えられ
た時の神權による按手任命

上にあげた各祝福から私たちは
現世の初めから終りまで、そし
て永遠に末日聖徒の女性は、神
の神權によって、多くのそして
特別な祝福を受け得ることを見
るのである。

幼児の時彼女らは、父親の祝
福と彼女たちの仲間の間で自分
を認めるために各づけられる名
前とを与えられるのである。こ
の儀式は、神權の權威によって
なされるのである。彼女のバプ

テスマと聖靈の賜を受ける確認
は、彼女を教会に導き入れるの
である。これらの祝福は、特別
な祝福であり、神權の委任され
た力によってのみ受けることが
出来るものである。

神權をもっている彼女の父親
や兄弟と同様に彼女もまた、そ
の生活を通して、慮めや靈感や
導きとなる祝福師の祝福を与え
られる。彼女は、病氣の時やま
た神權の權威を通して主の助け
や支えとなる力が特に必要とさ
れるような時に神權の執行を受
けれるのである。

彼女が教会で特別な召しを受
け祝福が与えられる時、神權に
持つ彼女の信仰の結果として彼
女の能力が何如に増したかを覚
るであろう。

彼女自身のエンダウメントを
受けるために主の宮居に入る機
会と永遠の結婚の神聖なる儀式
の機会とは彼女への二つの最も
大きな祝福である。彼女の選ん
だつれあいのそばで、生涯に於
て最高の神權の儀式を経験する
のである。その儀式の効能は、
その人の信仰によるのである。

受け得る祝福

夫または父が神權を持ちそれ

を尊ぶ家庭は、非常に祝福され
ている、全ての家族関係は、優
れたことに影響され、全ての問
題は、両親が神權の力によって
助けと導きを求める時に解決す
るのである。

まだ福音の真理を受け入れて
いない夫を持つ女性たちに対し
てもバプテスマ、確任の按手礼
祝福師の祝福その他特別の祝福の
ような祝福が神權によってもた
らされるのである。

彼女たちの上に恐らくより大
きな責任、即ちこの機会が彼女
たちに与えられる以上、主の戒
めと教えの内に子供たちを育て
ると云う責任が彼女たちの上に
下るのである。更に、彼女たち
はまたワード部の会員への祝福
や益のためにその神權を使うよ
うに任命されたホームティーチ
ャーや監督の助言を喜んで受け
入れるであろう。

崇められ祝福された。

女性に創造主によって彼女た
ちに与えられた任務を通して非
常に祝福されてきた。イヴの
娘、マリアに神はそのひとり子
の母となる任務を託したのであ
った。母親としての任務を喜んで
受け入れ、その能力と正しい

洞察力で、それを満す女性は、
現世での生活における大きな満
足とこの世の後の生活に於る永
遠の喜びを覚るのである。

自分自身の過ちなくして直接
母親としての賜を行使すること
の出来ない女性に代理としてそ
れをなし得るのである。母親た
ることは、神權と同様、広くま
た代理として行使されるもので
ある。数多くいる無視された子
供たちは、母親の愛を必要とし
ている。(ウィズン ジョン
A.: 神權と教会管理八五頁)

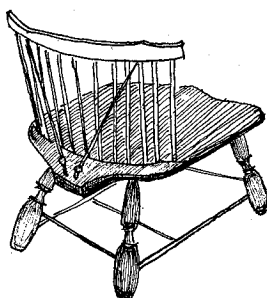
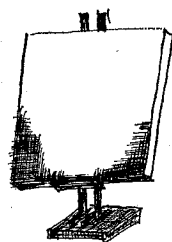
神の霊の子供を正しい成人と
なる様育てるより他に女性によ
り靈的な満足を与える現世での
経験があるであろうか？

討論のために
このレッスンの進行につれて
生じて来る質問

家庭用のために (家庭内の子供
たち)

家族が受けうる多くの祝福を
考えよ。祝福を伴う全ての儀式
が家族によって受けられている
かどうかをチェックしなさい。
もしそうでなければ、それが実
現するよう努力しなさい。

(成人用)
神權を通して受けられる諸祝福
に関して、貴方自身の、心掛や
行いをチェックしなさい。



図書案内

教義と聖約	上質革製合本	
高価なる真珠	モルモン経	一〇〇円
教義と聖約	合本	三〇〇円
高価なる真珠	モルモン経(新約)	三〇〇円
信仰箇条の研究	基督・イエス	三〇〇円
末日聖徒イエス・キリスト教会略史		一一〇円
モルモンとは(新版)		一五〇円
総合聖句の手引		一五〇円
メルケゼデク神権、教師と生徒用		二二〇円
モルモン経の読み方と手引		一五〇円
アロン神権者用学科課程		二二〇円
神の王国		二二〇円
アロン神権者用手引		一〇〇円
アロン神権のなかの祭司		一八〇円
回復された神の教会		一〇〇円
神と人		二〇〇円
家庭に於ける神権の発揚		一五〇円
モルモン経の新研究		三三〇円
日本系図探求要覧		一一五円
扶助協会手引		一五〇円
求道者教育法		一二〇円
道は開ける		四五〇円

日曜学校用

モルモン経物語	一五〇円
旧約聖書物語	一五〇円
福音の実践	二〇〇円
我等の標準聖典	二〇〇円
古代の使徒	一五〇円
教義と聖約の教え	二〇〇円
福音の紹介	一七〇円
完成への道	一〇〇円
宗教生活	一五〇円
奇しきみわざ上巻・下巻	各二〇〇円
家督権の祝福	一〇〇円
家族の昇栄	二〇〇円
シオン山の救い手たち	二〇〇円
レッスンの手引	六〇円

M I A 用

M I A の手引	二二〇円
我らは信じる	二〇〇円
我らは生きる	二二〇円
我らは奉仕する(66年度テキスト)	一五〇円
素晴しき考え(66年度テキスト)	二〇〇円
生活の目標	一五〇円
今日の十誡	二五〇円

エンサインローレルの手引……………一五〇円
演説が上手になる法……………一五〇円

ロールブック

M I A	一〇〇円
扶助協会	一〇〇円

讃美歌及び歌集

末日聖徒讃美歌集(新版)	四〇〇円
リクリエーション歌集	四〇〇円

その他ブックカバーなど

モルモン経カバー	二〇〇円
教義と聖約カバー	二〇〇円
合本カバー	二〇〇円
信仰箇条の研究用カバー	二〇〇円
聖餐カップ(一箱)	二五〇円
聖餐クロス(一セット)	三二〇円
ブレットトレイ	一三七五円
ウォータートレイ	二七五〇円
LDS パッジ	一〇〇円
よりよいあなた	一七〇円

図書の購入は支部長会に申し出てください

聖徒の道は

私たちが真理を知る「てだて」であり

私たちの心と心がかよう道です

あなたの霊の進歩のために

あなたの信仰のかてのために

お役に立つ本であればと思います

支部所在地

北海道地方部

- 旭 川 旭川市8条5丁目
M I A集会所 旭川公会堂
電話 (2-1545)
- 室 蘭 室蘭市幸町 89
電話 (7054)
- 小 樽 小樽市富岡町 1ノ35
電話 (2-8224)
- 札 幌 札幌市北2条西24丁目
電話 (63-7866)

東中央地方部

- 群 馬 高崎市並榎町 275
電話 (2-7121)
- 甲 府 甲府市中央3丁目 12-2
松 本 松本市開智 1ノ1ノ6
- 新 潟 新潟市中大畑町 557
電話 (2-8660)
- 仙 台 仙台市光禅寺通り 28
電話 (25-0897)
- 東 京 中 央 東京都港区青山北町 6ノ34
電話 (408-3307)
- 東 京 北 東京都中野区江原町 1ノ8ノ14
電話 (952-1531)
- 東 京 東 東京都江戸川区西小岩 5ノ8ノ6
電話 (657-5223)
- 東 京 南 東京都大田区南千束町 2-25-11
電話 (729-6311)
- 東 京 西 東京都武蔵野市吉祥寺東町 1ノ7ノ7
電話 (22-6764)
- 山 形 山形市七日町 4丁目 12ノ23
- 横 浜 横浜市港北区篠原町 29
電話 (49-8772)

西中央地方部

- 阿 倍 野 大阪市阿倍野区阪南町中 1-11-8
電話 (623-4315)
- 福 岡 福岡市浄水町 46
電話 (52-8653)
- 広 島 広島市古田町古江 400ノ3
電話 (31-6135)
- 金 沢 金沢市兼六元町 3ノ8
電話 (21-2131)
- 京 都 京都市左京区下鴨松原町 44
- 名 古 屋 名古屋市昭和区北山町 3ノ41
電話 (73-4210)
- 西 ノ 宮 兵庫県西ノ宮市仁川町 4ノ54
電話 (5-0141)
- 岡 町 大阪府豊中市岡町北 2ノ18
電話 (52-1236)
- 岡 山 岡山市学南町 1ノ13ノ11
- 三 ノ 宮 神戸市灘区篠原本町 4ノ35
電話 (86-2602)
- 柳 井 山口県柳井市今市 391

沖縄地方部

- 普 天 間 沖縄宜野湾市野嵩区 328
- 那 覇 沖縄那覇市崇元寺町 1-128-20
電話 (8-6568)

- 建築部事務所 東京都港区青山北町 6ノ34
電話 (402-4010)

(誤りのある支部の支部長はこ一報ください)

聖徒の道

一九六六年十二月一日発行

振替口座 東京一六二二六番

発行人兼編集人 アドニー・Y・小松

発行所 東京都港区南麻布五丁目八番十
末日聖徒イエス・キリスト教会

印刷所 株式会社三五堂

定価八十円

一年予約八百四十円(申込は支部長まで)